蛇神と少女の幻想曲

扇の人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
蛇神と少女の幻想曲

【Ｎコード】
Ｎ５７８６Ｔ

【作者名】
扇の人

【あらすじ】
誰でも扱える”科学”が”魔法”を淘汰した世界。
しかし、魔法は消えない。消えることが出来なかった。
科学で対処の難しい”異形”の存在、魔法を用いてしか精錬できない物質の必要性。
特に前者は妖怪、悪魔、神と言った人外の化け物である。
幻想を打ち砕くのはやはり同じ幻想、同種の力が不可欠なのだった。
しかし、人々は知らない。
魔法が物語の中だけの存在ではないことを。

これはとある事情から魔法を秘匿された世界で、一匹の異形と出会った少女のお話。

第一話　蛇と少女の初舞台

それは唐突の出来事だった。

『余さ、やっと約束した封印期間が終わるわけよ』

上級魔族が数多く巣くう廃城から戻り、回収してきた戦利品をチェック。

希少品を除いて換金し、一息入れた所で相棒の男騎士は脈絡もなく宣っていた。

困るのは消耗品の補充と整理を行っていた魔法使いの娘である。

しかし娘にとって、この程度の電波話は慣れたもの。

相づちを打つでもなく、脊髄反射的に叱責の言葉を紡いでいた。

『君、ゲームのやりすぎ。黄色い救急車呼んであげようか？』

『本当だって、こう見えても昔は世界に名を轟かせた神様ですよ？

これ本当』

『与太話が無ければいい人なのに・・・』

『一年以上付き合いがある友達に何言うのこの子！？』

『で？』

『冷たい娘だなぁ』

『で』

『容赦ないっすね』

『最後のチャンス』

『マジすんません、話を戻します。とゆーことで、久方ぶりに街を闊歩したいわけですよ。金は暇に飽かせた電子取引で稼いどるから一つ余と会わないかとお誘いを』

『それはいつ？　私、昼間だと無理だよ？　年がら年中遊んでるニートと違うんだよ？』

『ああ、明後日の土曜だからだいじょ・・・どこまでセメント！？』

ここでイニシアチブを終始握る魔法使いは一考する。

不安がないと言えば嘘になるが、何だかんだと付き合いの長い彼と一度会うことは吝かではない。

そこでスケジュールを思い返し、特に何もないことを加味して―

―――――――

『いいよ。　でも、妙な気を起こしたら1をプッシュ、も一つ1をプッシュ。最後に0と通話ボタンを押すのであしからず』

『信用ゼロっ！？』

『ゼロじゃないからOKしているんだけどね。あ、そろそろ寝ないと学校が』

『ういー、じゃあ場所と時間はメールしておくわー』

『はいはい、一応楽しみにしてます。お休みなさい』

『おつー』

別れの挨拶を済ませると、魔法使いの少女は瞬時に姿を消した。

それもそのはずだろう。

これはオンラインゲーム内での話であり、魔法使いを操っていたプレイヤーが接続を切断したのだから。

「・・・安請け合いしすぎたかなぁ」

続いてパソコンの電源を落としに掛かる魔法使いの中の人こと、黒澄硯梨は盛大に溜息を吐いた。

「でもβ版から遊んでる仲だし、悪い人じゃない・・・はず」

椅子の背もたれに背中を預け、壁に掛けた鏡を何気なく覗き込む。

写るのは忘れようのない己の姿。
長めの黒髪に白い肌。派手さはないけれど、結構可愛い部類に入る容姿じゃないかなと我ながら思う。
親友は磨けば光ると色々進めてくるが、面倒なのでスルー。
こう見えても二回も告白を受けている身だ。
今のスペックで十分である。

「ひとまず明日は学校もあるし寝ようっと」

愛用のパソコンのファンが停止し、完全停止を確認した少女はベッドに潜り目を閉じる。
心を揺らすのは初のオフ会（？）への不安と期待。
まだ年若い硯梨にとって一大冒険なのだから仕方がない。
救いは期待サイドに大きく寄っていること位だろうか。

「・・・・くぅ」

気が付けば意識は闇に落ち、意識は夢の中だ。
しかし少女は夢にも思わない。
この瞬間、平穏な人生の道からスピンアウトした挙げ句、魑魅魍魎の跋扈する世界に足を踏み入れてしまったと言う事を。
黒澄硯梨、１５歳。この時はまだ何も知る余地はなかった。

＜第一話～蛇と少女の初舞台～＞

硯梨は激しい後悔の念に襲われていた。
生まれてこのかたずっと暮らしている天夜市は比較的新しい街であり、今も開発が続く中々に栄えている中堅都市だ。
とはいえ郊外に少し出れば手つかずの自然が残っている事も理解しているつもりだった。
が、一寸街から離れただけで交通手段が一時間に一本も通らぬバスしだけとは如何なものか。
約束したからにはと苦労して来てみれば、そこは山登りにも向かず、ピクニックにも向かず、全てが中途半端な山の中。
人影も当然皆無で、有るのは伸びるに任せた木々達だけである。

「・・・騙された？実はドッキリ？」

ふと脳裏をよぎるのは、年齢も性別も雑多な人々が失踪を続ける怪奇事件だ。
今朝の新聞によると被害者は増え続け、死体どころか目撃者すら皆無らしい。
そんな危険なご時世に、人気も無い山中にのこのこと呼び出されるままに来てしまった。
これはひょっとすると死亡フラグ？　と一筋汗を垂らす硯梨である。

「でも、約束の頃合いだよね・・・うん」

不安そうに息を潜める少女が立ちつくすのは、廃墟にしか見えない社だった。
元は土地神を祭った神社でも今や神主すら不在であり、うわさ話

ではお化けが出るとも言われる心霊スポットと聞く。
しかし此処こそ待ち合わせの場所。こんな場所を選んだ顔も知らぬ友人が実に恨めしい。
「あ、ぴったり三時。この際からかわれたでいいから、変な人は来ないで欲しい・・」
時計の針がL時を描いた瞬間――――それは起きた。
「あ、あれれ、地震？」
最初はゆっくりと、次に地面が割れるかのような揺れがやってくる。
こんな時に地震だ。それもピンポイントに狙い澄ましたかのような。
反射的に腐食具合の弱い社の柱を掴む硯梨だったが、続く大地の異常を上回る出来事のせいで驚く暇を与えられなかった。
聞こえてくるのは体の芯から怖気を呼び覚ますような叫び声。
それもどんな生物が上げたか判らぬ異端の奇声である。
「うーん、何が何やらさっぱり。早く帰れという神様の掲示なのかも」
普通の少女なら恐怖で縮上がるしかない状況だが、この娘は違う。
震えるどころかやれやれと溜息を吐く余裕すらあり、臆する様子は見られない。
目の前の現実をありのままに受け入れる、それが黒澄硯梨と言う少女の強みだった。
「今なら帰りのバスにもギリギリ間に合うし、ひとまず下山を――

――」

揺れも収まった為、踵を返し帰路に着こうとした瞬間である。
ふと見上げた空に異物が混じっていた。
それは白い塔のようで、よく見れば光で出来たような八枚の板を煌めかせている。
何だろうと首をかしげる硯梨だが、答えは空から降ってきた。

『欠伸しゅーりょー、これこれせっかく来たのに帰るな娘っ子』

鎌首を擡げて硯梨を見下ろすのは蛇のような何か。
あまりに巨大すぎて生物だと気が付くのが遅れてしまったが、それは塔などではなく巨大で人語を解す珍種の大蛇だった。
そこで硯梨は――――――――

「ごめん、私に爬虫類の知人は居ないよ。誰かと勘違いしてない？」

と、至って普通の態度で言葉のキャッチボールに応じていた。

『十中八九間違い無いと思っていたが、その空気の読めない無駄な大物っぷり・・・やはり硯梨？　お初にお目に掛かるけど、余ですよ、余』
「今時オレオレ詐欺は古いって！」
『突っ込むポイントがそこ！？　約束したじゃろ？　余はネトゲでつるんでるスネークさんですよ？　今日会う約束してたよね！？』
「ふーん、そうなんだ・・・・って、蛇が喋ってる！？」
『遅っ、マジ遅っ！』

大蛇は巨躯をくねらせ、もどかしさを体全体で表す。
対する少女は少々驚いても取り乱した様子もなく、至って平常心

なのが不思議だ。

「じゃあ与太話と聞き流したけど、本当に神様なの？」

『うむり。太古より君臨する神祖の一柱にして、あまり負けない無敵風味の蛇神が余です』

「やっぱり“復活の生け贄は貴様だー”とかそんな風に私を食べる？」

『食べません。食べたら遊びなくなるし、ぶっちゃけ人間は食べ飽きた。後千年くらいはもうお腹一杯。余はやりたいことのみを追求する神様であり、虐殺大好き戦争の神様みたいのとは似ても似つかない温厚な生物です』

「ふーん」

『うわーい、この子全く信じてないよ！？』

完全に当初の予定が狂っていた。

別に怯えて欲しかったわけもなく、何がしたかった訳でもない。

しかしこれはあんまりだ。

恐怖でも畏怖でもなく、ジト眼の少女が向けてくるのは“可哀相な妄想癖”的な憐憫の感情とはいかなるものか。

本気で困り果てた大蛇は少女から目を逸らし、在らぬ方向を見る。

するとそこに救いがあった。

「ねぇ、私だけ名前で呼ばれるのは嫌。確かに本名プレイだったから当然と言えば当然だけど、言葉が通じるんでしょ？　この際神様でも爬虫類でもいいから名前を教えて」

『この娘は余を何だと・・・・あれ、目から汗が？おかしいのぅ・・・はは』

信仰や畏敬の対象にされた経験は無数にある。

が、ここまでいい加減な扱いなど長い人生でも初めての出来事だ。

しかし自称神様はへこたれない。折れそうな心を辛うじて支え、平静を取り戻す事に成功する。

『余は神様、こんな事じゃ負けません。平常心・・・・平常心』

「で？」

無自覚で内心を声に出していた大蛇は、つい先日のやり取りと同じ言葉を聞いて戦慄した。

これは間違いなく最後通告。彼女の求める答えを口にしなければ、この娘は間違いなく怒るに違いない。

ゲームとはいえ長く交流してきた中で、それがどれほどヤバイかは身に染みている。

身の危険を感じたヘタレは慌てて口を開いた。それも存在として圧倒しているにも関わらず敬語で。

『ええとですね、地方によって呼び名が違うので固定名はありません。なのでこの際心機一転、余が今後使用する名を硯梨が決めるがよいかと』

「じゃあシロ」

見た目一発、捻りが一ミクロンもない適当な硯梨だった。

『余は犬じゃないよ！？　しかも安直だとは思わんかの！？』

「・・・んー、じゃあ季節に併せて“七夜月”とか？　他だと“ゲレゲレ”とか・・・・“アルトアイゼ――――」

『七夜月がいいよ！　超気に入ったよ！』

「気に入ってくれたなら、これからはそう名乗ってね」

余談だが、硯梨はメールアドレスすら契約日に設定する質実剛健な娘だったりする。今が何月かはお察しだろう。

事実上の一択から露骨に妥協した大蛇こと月は、一度力を見せ無ければならないと判断。
主導権を握り替えすべく、先ほど見つけておいた獲物をちらりと見やり告げた。

『さて・・・でっかい蛇の化け物くらいにしか見られて無さそうなので、ここらで余の力を見せつけたいと思います』
「？」
『多少の火の粉が降りかかるかも知れんので、余の近くに来るのだよ』
「だから説明を」
『口答えせずにハリー。余的にかすり傷でも負わせたら負けかなぁと思ってるのです』
「仕方がないなあ」
『あああ、幾多の国々を震撼させた余が娘っ子一人に何故か逆らえん・・・・』

無警戒に月の元へと駆け寄ってくる少女を見やり、七夜月は思う。
ネット上の交流により少女の性格は掴んでいたが、現実でも全く変わらないとは驚きだった。
さすが自分が目を付けた娘と複雑な心境の月である。

「えーと、何をするの？」
『少し待つのだよ。そろそろ――――来たか』

草木を無理矢理押しのける音が聞こえた次の瞬間、二つの人影が飛び出してくる。
人影は男達で、抜き身の刀や黒光りする拳銃をその手にぶら下げていた。

「異常な魔力の高まりを調べに来てみれば、やはり異形か！」
男達の片割れはそう言いながら月を見上げ、次に硯梨を見て二の句を紡ぐ。
「娘、お前がこの異形を呼び覚ました張本人だな！恥を知れ！」
完全に誤解されていた。
何が何やらさっぱりだが、勝手に自己完結されても困る。
硯梨は被害者であり、そこの大蛇に呼ばれて来ただけなのだ。
「勝手に決めつけないでください。私は友達に会いに来ただけで、怒られるようなことは何もしていません！」
『うむ、余と硯梨はペアで狩りを続けてきた相棒よ。対人戦でもランカーだった！　ふはは、凄いだろう！』
月としてはフォローしたつもりだった。
しかしその表現は事情を知らぬ彼らが誤解を招く物であり――――
「・・・見た目に惑わされる所だった。その齢にして人間狩りに手を染めるとは何たる悪魔。異形に与して人の世に害為す魔女め。対魔師として見過ごすわけにはいかん。ここで討ち取るのが情けだ！
殺るぞ！」
応、と返事が上がって全く噛み合わない交渉タイムが終わった。
硯梨は呆れ、月を見上げて言う。
「この展開を予測してたんだ・・・・」
『うむ、まぁ見ているのだよ。余の力の片鱗を見せちゃるから！
いくぞ余のターン、ドローッ！』

月はそう言いながらも微動だにしない。故に先手を取ったのは男達だ。
硯梨からしてみれば漫画やアニメの世界でしか見たことのない魔法陣を展開し、露払いと炎の弾丸を拳銃から連射。
続いて大上段に刀を振りかぶった男が地面をえぐる踏み込みを見せる。
これぞ幾多の異形を屠ってきた連携のはずだった。
『はっはっはー、その程度で余に刃向かう？　一万年早いわ！』

月は傍目では何もしていない。
しかし灼熱の炎弾は撃ち出した瞬間に四散。バックファイアで術者の全身を焼き、一人目は勝手に自爆。
斬撃を放とうとした男に至っては何も無い空間で四肢を硬直させて脂汗を浮かべている。
硯梨には何が何やら判らないが、月の言葉を聞く限り彼が手を下した事だけは理解できた。
そこで答えを知る友達に素直に聞こうと大蛇の腹に手を触れる。

「んと、状況解説を頼んでも？」
『凄いはしょるとだね、連中は余のような人外を異形と呼び、存在を許さず皆殺しだぜーって人間の集まり。ファンタジーな技術を組み上げて今のように炎を生み出したり、身体能力を強化してうちらに牙を剥く・・・・分かりやすい例えだと魔法使いって感じだの』
「魔法って本当にあるんだね。私びっくりだよ」
『滅茶滅茶平常心に見えるがのぅ・・・・』
「これでも結構驚いてるよ？　それでえーと、今の自滅っぽい現象は？」
『余がやりました。飛び道具に対しては魔法の設計図に干渉して暴

発させ、そこで変なポーズのまま動かない男は周囲の空気分子を結合して固定したのだよ。殺すのは簡単だけども、今後の為にメッセンジャーとしたい訳で』

昔の自分ならこんなまどろっこしい真似はせず、邪魔をすると判っていればこちらから出向いて全てを滅ぼしていただろう。

長い封印期間の間にずいぶんと丸くなったものだ、と月は思う。

「ふーん、凄いね。ちなみに私にも魔法って使える？」

『今日のデートが終わったら適正チェックをしてみようではないか』

「虚構じゃない現実でも魔法使いになれたら嬉しいな、きっと楽しそう。後、デート言わない」

『・・・んじゃまサクサクっと用事を済ませよう。おい人間、口は動かせるだろう？』

すっかり放置プレイだった刀使いを見下ろす月は、不自然な体勢を余儀なくされていた男に四肢の自由を僅かに戻して楽しげに嘲笑する。

「・・・・何だ」

『余の名は本日より七夜月。貴様ら人間が言うところの神である。お前は勘違いしているようなので訂正してやろう。人の法に縛られるつもりは毛頭無いが、さりとて人をどうこうするつもりはない。故に貴様の仲間に知らせておけ。余がいくら寛大でも、刃向かう存在は路傍の石であろうとも必滅すると』

「化け物風情が神を名乗るか。よかろう、上がどういう判断を下すか俺には判らん。しかし、確かに伝えよう。貴様が何者であれ、この場の支配者は・・・お前だ」

『では解放だ、妙な気を起こしたなら原子レベルまで分解するぞ人

間。そこの燃え滓を拾ってとっとと帰れ。余はこれからわくわくお食事タイムで忙しいのだ』
「貴様っ、さては人を喰らう気か！？」
『骨が多くて喰いにくい人間なんぞより、今までネットで見るだけだった美食の数々を貪り食うに決まっている！　昔では考えられない新技法に料理ジャンル、特に進化の著しいラーメンが気になって仕方がないわっ！』
「・・・・は？」
『でも今日は相棒が一緒なので、女受けの良い高級イタリアン祭と洒落込みます』
「いやその・・・」
『予約の時間までそんなに余裕がない。そろそろ切り上げて良いか人間？』
「お前本当に異形か！？　仮に異形と認めても、方向性おかしいぞ！？」
『何その小物に対するようなディスり方、余が何をしたと！？』
「黙れ、人にかぶれた人外め。一瞬でも恐怖して損したわっ！」

大人しく逃げ帰っていれば良かったものを、こうも挑発されては沽券に関わる。
せっかく手加減してやったのに、これはいよいよ教えてやらねばなるまい。
そう考えた自称神様は不意に声を低くする。

『よかろう、ならば見せてやろう・・・・』

安く見られたことに腹を立てた蛇は天に向かって顎を広げる。
そして、ほんの少しだけ世界を改変した。

『うむ、ターゲットはアレで良い。見ていろ、硯梨と余を馬鹿にし

た人間っ！』

口蓋に産まれるは光。
正も邪も等しく滅ぼしかねない純粋な破壊の力が蓄えられていき、ついには力を解き放つ。
男の産毛が逆立ち硯梨が期待の眼差しを浮かべて見守る中、空を貫くは光の柱。
烈光は雲を霧散させ、太陽を上回る輝きで視界を塗り替えていた。

「な、何をした化け物！　まさか・・・今の怪光線を街に！？」
「被害が来るようなことをするなら、ちゃんと合図してよ・・・」

別の意味で憤る二人に辟易する月だが、確かに解説しなければ理解して貰えなさそうだと判断。
仕方が無くヤレヤレと視点を眼下に動かす。

『人間、今の火力は理解できたか？』
「ああ、何だ今のビーム砲みたいのは！　何処を撃ったか答えろ！」
『荷電粒子砲で人工衛星を打ち落としてみました。何百年も暇だったので、色々勉強して覚えた改良版必殺技よ！』
「待て待て待て、何だって？　聞き間違えだよな？　どこのＳＦだって感じの技名で衛星を破壊なんて・・はは」
『マジマジ、狙ったのは公式に存在しない軍事衛星風味だから無問題。変なの落としてＢＳ見れなくなっても困るからのー』
「・・・」
『なぁ人間、そろそろ切り上げないか？　お食事前に寄りたいところもあるのでな、これ以上手間をかけさせるなら殺すぞ☆』
「・・・さしあたって危険もないと判断する。強力だが凶悪ではないらしい異形よ、この場だけは引かせて貰う」
『すーずーり、デート行くぞー』

「聞けよ！」

既に月の眼中には硯梨しか写って居らず、やりきれない気持ちで男は相棒を拾う。

そして最後に状況を飲み込めていない様子の少女へと忠告した。

「娘、お前は・・・人間か？」

「人間以外に見えると言うなら、私は怒りますが」

「そ、そうか、では忠告しておこう。何者かを問うつもりはない。しかし、化け物の言葉を鵜呑みに信じるな。人は人としか解り合えない・・・それが真理なのだから」

「私は自分の目で見た物が真実だと思います。このへたれ蛇が友人になり得るのか、それもこれから見極めるつもりです」

「そうか・・・好きにしろ」

頷きながらも自分の考えは曲げるつもりはない。誰の言葉であれ鵜呑みにしては同じだと硯梨は思うから。

やさぐれた雰囲気の男を見送りながら黙考していると、上空より声が投げかけられる。

『さて、そろそろお出かけ準備』

月は二人きりなったことを確認すると、やおら首を振り出していた。

すると不思議なことに一降りするごとに体の色が透け、同時に体積が縮んでいく。

気がつけば蛇の輪郭が人のソレへと変化。

少女が不思議そうに見つめる中最終的に現れたのは、表情に締まりがない三枚目の２０歳前後らしき青年だった。

「これで良し。レッツゴー遊びの国・・・・って、なにかの？」
「人に化けられなら、最初からそっちの姿で居てよ！？」
「えーとですね、インパクトって大事じゃないですか。ならばエンターテイメント性も大切じゃないかなーと」
「確かに驚きの連続だったけど・・・」
「なら大成功。お姫様を楽しませるプロローグとしてはまずまずと自画自賛するよ余は」

ああ、確かにこういうキャラだった、と少女は傍目には判らない身の硬直を解く。
少しばかり個性的な外面に身構えてしまったが、化け物は化け物でも硯梨のよく知る友らしい。
ならば見た目は二の次、内面さえ通じ合えるなら姿形は関係ない。

「あはは、ゲームと同じだね。今の台詞は前に聞いたような気がするよ」
「うむり」
「うん、君は私のよく知るあの騎士だ。心配するだけ無駄みたいで嬉しいな」
「余も同じ意見。これからも末永く頼むよ」
「こちらこそ」

異常を異常とも思わぬ少女は、すっかり人にしか見えなくなった月と握手を交わす。
それは信頼の証、初めて出会った月を受け入れるための儀式だ。

「よーしテンションアップ！　この勢いのままフィーバー！」
「おー！　と乗ってみたのはいいけど・・・どうやって移動するの？　やっぱり瞬間移動とか、空をぎゅーん？」
「ふふふ、聞いて驚け。すみません、余は特殊移動手段を持ってい

ません」
「・・・・」
「文明の利器にして省エネな感じでエコライフの市営バスがいいんじゃないかと」
「・・・使えない子だ」
「破壊と創造が本質の余は基本的にスローライフ。急がば回れがモットーです」
「そうなんだ。所で知ってる？次のバスまで後２０分。コレを逃すと次は二時間後だよ？」
「あっはっは、レッツダッシュ！」
「無計画は駄目だ・・・・って、放置！？待ちなさいってば！」

かくして少女は異形と出会い、波瀾万丈の毎日・・・その一歩を踏み出した。
これが吉と出るか凶と出るか、それは誰にも判らぬ未来だった。

第一話　蛇と少女の初舞台（後書き）

ご指摘、感想等があれば宜しくお願いいたします。

第二話　魔法使いの産声

ずるずる、と言う音が延々と続いていた。
音の主は満面の笑みで箸を動かす三枚目風の男である。
「あ、メニューの端から端までもう一度追加で」
四人掛けのテーブルを埋め尽くすのは、空の蒸籠が作る巨大な塔と丼の山。
音の正体は月が蕎麦を啜る食事の音だった。
「・・・まだ食べ続けるなら、私は先に帰る」
「そ、その、まだ腹六分目」
「さっきイタ飯を十分食べたよね？　店の人が真っ青になって許しを請うくらい」
「ご、五百年ぶりの御飯でお腹が減っていまして」
「じゃあお一人でどうぞ、私はこのあんみつを食べたらお暇するから」
「店員さーん、今の注文キャンセルっ！」
渋々追加を断念する月だった。
だって仕方がない、硯梨の発言は何時だってセメント過ぎる。
まだ話さなければならない事が山のように有り、置き去りにされても困るのだ。
「うう、まだデザートに手を付けてないのにのぅ・・・」
「ここの甘味はメインの売り物より大人気、自信を持って勧められるお店だよ。むしろ蕎麦をこれだけ食べたのは君が初めてなんじゃ・・・」

「じ、次回はそっちを食べ尽くしてやるわーっ！」

こんなやりとり後に店を出たわけだが、いざ会計しようとしたところで珍事に遭遇する。

それは硯梨も初めて見る店主の姿。無愛想で有名な蕎麦打ち職人がレジに立っていた。

「・・・これほど旨そうに俺の蕎麦を馬鹿食いしたのはあんたが初めてだ」

「む、お主が調理人か。中々の美味だったぞ、また足を運ぼうではないか」

「そうか、また必ず来いよ」

「うむ。蕎麦屋白杉・・・その名、心に留め置く事を約束しよう」

ぶっちゃけ硯梨はここの蕎麦がそれほど美味しいとは思わない。それは一度食した客全ての総意であり、妥協して極普通の味が精一杯だろう。

そこで――――

「月」

「？」

「ひょっとして、舌か頭がおかしい？」

ふらりと入った蕎麦屋を出た少女はストレートに疑問を投げ掛ける。

少々言葉が攻撃的だが、この短期間で判ったのだ。

この人外を相手にする場合、遠慮をしない方が良い結果を生む事を。

「あのー硯梨さん、そんな美食倶楽部の主催みたいな事を言われて

も・・・マヨネーズはつけとらんのよ？」
「だって微妙な蕎麦を美味しそうにもりもり食べてたし」
「ああ、はっきり言おう。“料理”としては不味い。しかし“蕎麦”としては美味かった。余が昔食べた蕎麦はだね　蒸気で蒸したボロボロで味のないものだったわけでして」
「あ、下の下と中の下を比較したから大絶賛？」
「正解。昔に比べたら色々発展してるなーとしみじみ食べたのだよ」
「ふーん、歴史を感じさせる重みのある言葉だね」

さすが神様、人生経験は豊富らしい。

「長生きは伊達じゃないのだよ。それよりもさっきの話だが・・・」
「家にはもう飼い犬が居るし、きっと無理だと思う」
「え、ペット感覚？　余は神様ですよ？　祭られる存在ですよ！？」
「話を聞いて貰えるまでなら段取るから、後は頑張ってね」
「う、うわぁぁん！？」

四桁の人生経験もこの少女にかかっては全く役に立たない。
しかし何一つ思う通りに行かない月だが、何でも自由に出来るが故の不自由さが心地よい。
口では泣き言を言いつつも、心底楽しそうな笑顔を浮かべる化け蛇だった。

＜蛇神と少女の幻想曲～第二話～　魔法使いの産声＞

黒澄家は未だかつて無い緊張に襲われていた。
それもそのはずだろう。まだ高校生活一年目の娘がいきなり年上の男を連れてきて、トドメとばかりに住まわせて欲しいと言ったのだから。
その上二次元に毒されたのか、男を妖怪の類と真顔で言うのだから救いが全く無い。
そしてそんな娘を見た父親は、信じられないといった表情を張り付かせ言う。

「学校で辛いことでも？」
「ん、特に無いかな。自分で言うのもアレだけど、私は結構教師受けの良い優等生だし」
「なら、その男に騙されて・・・とかでは？」
「それも違うと思う。お父さん、私の話を全く信じてないでしょ」
「お父さんは悲しいです。そもそも信じろという方が無理だ！お母さんも言ってあげなさい！」

しかし妻は錯乱した夫に対し、酷く冷静な様子である。
娘によく似た妙に若々しい硯梨の母は顎に手を当て何やら考え、自信を持って育ててきた娘に目を向けた。

「私は硯梨が嘘を付くような子とは思えません。貴方がそう言うのなら、そこの彼は妖怪さんなのでしょう。違って？」
「うん、月は自称神様と言い張る大きい蛇。この目で見たから間違いないもん」
「なら、証拠を見せなさい。百聞は一見にしかず・・・そうでしょう？」

「だってさ」

くすりと笑う硯梨は首を傾けて相棒の顔を眺め見る。
すると蛇神は任せろ、と頷くと母親へと向かって言った。

「よかろう。では、何をすればよいかね？」
「そうねぇ、じゃあ神様らしく奇跡でも起こして貰おうかしら」

その言葉に月は黙考し、何やら案が浮かんだのか柏手を一つ打つ。

「では・・・見た目からソレっぽく始めよう。限定変化解除！」

一瞬ノイズのようなものが走ったと思うと、月の姿は人間サイズの蛇に変化。
硯梨が見た本来の姿に比べれば小さいが、それでも十分化け物サイズである。

『かなり圧縮したけど、コレが余の正体・・・ＯＫ？』
「あらびっくり、本当に爬虫類だったのね」
『うわーこの親にしてこの娘有りの反応！　全く驚いてないのぅ！』
「あっちはそうでもないわよ？」

見れば父親こと睦十は真っ青になりながら月を見つめ、蛙のように硬直していた。

『父君の反応が普通では・・・・』
「あの人はいいから、何か見せてくれるのでしょ？　早く、早く」
『り、了解。じゃあ派手で判りやすい火の玉でも出そうと思います』
「火事にしたら駄目よ」

硯梨母の注文に応えるべく最も得意な固有能力を慎重に起動。
空気中の分子運動を制御して加速し、生み出したのは熱量の塊だ。
具体的に言うならばソレは超圧縮された炎、触れれば鉄をも溶かす危険な代物である。

『二重に空気の膜で覆っているので外部に熱は漏らしません。試したいなら何かを投げ込むことをお勧めとゆーか、直接触ると肉どころか骨も残らず溶けるのです』

「む、むぅ、ならば家長として俺が実験を・・・とりゃぁっ！」

ここが父親の威厳を取り戻すチャンスとでも思ったのだろう。
睦十はびくびくといった面持ちで、手頃に転がっていたゴルフボールを煌々と輝く火の玉へと投げ入れる。
すると結果は素人目にも判りやすいものだった。

「ぁ、蒸発した」
「凄いわねぇ、お母さんも一寸ビックリ」

目を輝かせて拍手する母・・・雅美は初めて遭遇する異端の力をあっさり受け入れていた。
月の個人的感想を言わせて貰えば、この母子は頭の捻子が一本足りないような気がしてならない。

『まだ何か必要かのー？　丁度近くを飛行中の旅客機でも撃墜でも？　それとも雷の雨を所望かね？』
「いえいえ、もう結構。いいでしょう、こんなに愉快な生き物なら大歓迎です。私が現役の頃に出会っていたらさぞかし楽しかったでしょうね」

『つまり？』
「二回に一部屋余ってます。其処を使いなさい」
意外にもあっさりＯＫが出ていた。何やら不穏当な発言が混じっていた気もするが、細かいことを気にしない化け物は軽くスルー。
そこで月は人型に戻り、持参したトランクケースをテーブルに載せて言う。
「では、これを当面の世話賃として納めさせて貰うよ」
広げたトランクにはギッシリと札束がつまっていた。
すべて新札、銀行の保証印が押された一万円札の束が、である。
「これは余が手慰みに稼いだ真っ当な金。戸籍の捏造やらなにやら多少悪いこともしたがの、その辺は不問とゆーことで」
「ふーん、私の目を見て同じ台詞が言える？」
「も、勿論じゃよよよ？」
考えてみれば、外食やらなにやらで景気よく使っていた。
もしかすると途中で立ち寄った銀行でもこっそり襲ったのでは、と硯梨は勘ぐりじっと被告人の目を見つめる。
しかし目に濁りは見られず、狼狽えた口調とは裏腹に視線を背けようともしない。
そのため出された判決は肯定的な物だった。
「うん、推定無罪」
「いつの間に捌かれる立場に！？」
「気にしない気にしない。それじゃお母さん、月を部屋に案内してくるね」
「はいはい、行ってらっしゃいな。えーと、爬虫類さん」

「その呼び方は止めて頂きたく・・・・」
「知りません。この家に住む以上、私がルール。文句があるなら捻り潰します・・・いいですね？」
「り、了解であります奥方っ！」
「よろしい、では行きなさい蛇さん」

神様でも逆らえない存在が一人増えた瞬間である。

「・・・・現代の女は恐ろしいのぅ」

月はしょんぼりとうなだれつつも、手招きする硯梨の招きに応じて階段を上るのだった。
ちなみに階下では――――

「お父さん、これで家のローンも完済ですね」
「母さんはそれでいいのか！？」
「何かご不満でも？」
「アリマセン」
「なら良し」

何処ぞの蛇と少女のやり取りを思わせる家族会議があったとか無かったとかは、また別の話。

―硯梨の部屋―

月にあてがわれた部屋の隣、そこは硯梨の部屋だった。
手に入れた自室は半ば荷物置き場であり、好みに合うよう改装するまでは一人で居ても暇なだけ。
そのため時間を潰すべく少女の部屋を訪れた月は物色するべくきょよきょろと見渡し・・・落胆した。

「ここが硯梨の部屋かね？　何というか・・・・殺風景だのぅ」
「そう？　必要な物は揃ってるよ？」
「ぬいぐるみは？　ファンシーな小物は？　女の子の部屋なのに何も無いっておかしくないかの」
「人の趣味はともかく、魔術適正の検査を宜しく」
「り、了解。と言っても実はこっそり済ませてあります。余は出来る子なのです！」
「で？」
「うう、穏やかな声なのに背筋が氷る。出来ればもっと優しく――――」
「・・・で？」
「はっ、問題ありません。細かい部分を無視すれば、硯梨には魔術を扱う資格が備わっています。お望み通り、一流の魔法使いに育て上げますとも！」

握り拳を天井に突き上げ、無駄に熱の籠もった口調で月は言った。
ベッドに本棚、それに衣裳棚位しかない部屋の内装と同じく、主もまた無駄が嫌いらしい。
自然と敬語になってしまうが、ここで押し切らなければ何をされるかわからないのだ。

「じゃあ、そもそも魔法って何かから教えてくれるかな？」
「うむり。では、基礎中の基礎から。魔法とは無属性の魔力っつーエネルギーを抽出し、形にすることで始まります。生徒の硯梨君、ＯＫ？」
「はい、先生」
「では続けます。今の前提条件はいかなる魔法に置いても共通ですが、ここからは流派や術者の個性次第で千差万別。なので、硯梨には余が好んで使う独自理論を授けようと思います」
「ふむふむ」

ベッドに腰掛けつつ、硯梨はノートに要所要所を書き込んでいく。この辺りは性格なのだろう、一字一句を聞き逃さない真剣さである。

「例えば１００と言う答えを出したいと思いました。硯梨ならどんな計算を？」
「んと、５０×２？」
「他にも１＋９９、１＋１を繰り返す等、色々じゃろ？」
「はい、数限りない選択肢があります」
「１００が目指す効果、すなわち魔法。例えば“炎”とか“水”と言う属性を付与する度に計算式へ加算して、望む結果を組み上げることが主題になります。そして”炎”も”＋１”や”×２”はたまた”√７”と固定された定数ではありません。つまり、千差万別とゆーこと。ＯＫ？」
「うん」
「そこで登場するのが“ＭＣＡＬ”。これは“Ｍａｇｉｃ　Ｃｉｒｋｉｔ　Ａｃｔｉｖａｔｉｏｎ　Ｌａｎｇｕａｇｅ”の略称で、余が暇つぶしにと独自に作り上げた魔導言語だよ。これを使えば努力次第でどんな魔術も思いのままっ・・・・と、大丈夫かの？」
「少し意味合いが違いかも知れないけど、魔術をプログラミングす

るって事？」

ここまでは問題ないらしい。故に月はステップを一つあげた。

「正解。使い手は硯梨が初になる新型魔法・・・それが余の授ける術。巷で使われている近代の術式はコレに近いがの、ＭＣＡＬは完全なる上位言語だよ。そしてコレを選んだのには理由がありまして」

月は床に胡座をかいた姿勢から一心不乱に書き進める硯梨を上目遣いで見上げ、申し訳なさそうに言った。

「先ほどちょろっと言ったがの、硯梨は魔術師の素養を持っていても燃料となる肝心の魔力が少ない。むしろ皆無。これは余の綿密な測定結果なので間違いはありません。だから一般的な概念式を幾つも組み上げ、最後に複合させると言った複雑な工程は向かないのだよ。手順や工程が増えれば増える程ロスが増える・・・これは神様にだって避けられない真理なのです」

「そうなんだ。でも、資格があるだけで私は御の字。それに月の言いぐさだと、教えてくれる魔法なら大丈夫なんでしょ？」

「その通り。魔導制御理論では無駄を極力抑える数式的解釈が根っこにある為、従来よりもロスが遙かに小さい。さらに言えば装弾機構をベースに運用することで用いて魔力の外部供給も可能となるわけだ。どーよ！」

聞けば聞くほど優れた技術体系だと思うが、硯梨は問題点に気づいて口を挟む。

なにせこれから習得する事である。疑問を残して後に苦労をしたくない。

「となると、便利さの代償に概念式の丸暗記が必要とか？　暗記は

嫌いじゃないけど、あまり多いと苦しいかも」
「そこはそれ、技術の進歩は素晴らしい。昔と違って対抗策があるのだよ。とゆーことで今は深く考えずにお勉強を。余の教える魔術は才能も大事だけども、学習量がダイレクトに実力に反映されるのです。この辺り、普通の近代式が小学校レベルに感じられるほど難しいのがネックとも言えるかの」
「ん、了解です先生。近代式とか装弾機構とか単語レベルで聞きたいことは幾つもあるけど、解説がないって事は今必要な知識じゃないんだよね？」
「うむ、必要に応じて説明する。しかし、こーゆーときは素直だのぅ・・・・じゃあ試しに基礎行文から――――」

教師役の月は、異常に従順な生徒に苦笑いを一つ。
出来る限り判りやすく、しかし手は抜かない密度の濃い授業を続けるのだった。

―1週間後―

学校が終わると最短で月の元へ帰り、夜遅くまで魔法鍛錬に時間を費やす毎日。
今では実技も踏まえ、すっかり魔法使いらしくなってきた硯梨は今日も今日とてマンツーマンの講義を受けていた。

「この術式は誘導属性を付与した拡散する雷撃です。間違いは何処でしょう」
「１８行目の魔法陣展開で属性変換ミス。それと・・・あ、収束方式が非効率の二点？」
「正解。なんとゆーか、短期間なのに物覚えと応用力高いのぅ・・・」
「だって無味乾燥な学校の勉強と違って面白いもん。何より自分が必要として覚える実践学習だよ？　これはゲームをするために覚えるルールだと私は思うし、時間を忘れちゃうほど楽しいの」

月は教え子の優秀さに驚きを隠せなかった。
本人はゲーム感覚らしく理解できて当然と言い張るが、実用レベルに達する迄何年かかるか判らないと予測していたのだ。
理論体系に基づいており基礎を理解できれば誰にでも出来るとは謳うが、如何せん才能が物を言う世界である。
凡人が努力を重ねてもフェルマーの定理を解けないように、資質がなければ何一つ理解することが出来ない分野をいとも簡単に理解するその頭脳。
本人は無自覚のようだが、見たこともない才覚すらも内に秘めているようで何とも末恐ろしい。
せめて人並みの魔力があれば、と本当に惜しいと思う月だった。
しかし飲み込みが早いのは結構だが、おかげで教える側の準備に余裕がない。感覚で扱っている物を理屈に置き換えて説明するのは骨が折れるのだ。
が、そこは自称神様。お気に入りの娘の為にと帳尻をキッチリ合わせていたりする。

「実は今のが卒業試験でした。合格です、これからは単なる応用と

閃きが全てです」
「そ、そうなんだ。意外と簡単で驚いちゃった」
「君はさらっと言うがの・・・未知のジャンルにも関わらずこの学習速度は異常としか思えん。あれですよ、頭脳だけなら余の知る歴代魔法業界人の中でも五指に入るね。ぶっちゃけると天才です」
「あはは、照れちゃうから煽てるのは止めようね？」
「いやいやマジですよ？　惜しむらくは魔力保有量くらい？　天は二分を与えないと言うかもしれません・・・がっ！」
「が？」
「天は天でも、ここに二分を与える神様が居るのです！」
「”自称”であって、私はさっぱりも信じてないけどね」
「硯梨のための発言をスルーしてその御言葉！？　な、泣きませんよ？余は・・・余は神様だから泣きませんよ！？」

勝者、可愛らしい笑顔でピュアハートをえぐった少女様。
情けも容赦も悪意すら無い天然の刃、それは恐ろしく鋭い武器だった。
なにせ敗者たる大人は言葉とは裏腹に決壊寸前のダムのような涙を堪え、脱兎の勢いで逃げていったのだから。

「・・・・私、何か間違ったこと言った？」

誰に問うでもなく呟き本気で悩む硯梨だったが、それも長くは続かない。
思考を邪魔するのは扉が奏でる一定のリズム。音の正体は結局硯梨の部屋に戻ってきた月が律儀にノックする音だった。
そして次に”入るぞー”と声が聞こえ、現れるはすっかり立ち直った様子の自称神様である。

ただしその手には出て行った時と違い、一降りの杖が抱えられている。

「仕切り直して余のターンっ！　何はともあれ卒業の証を授けます。欠点を潰し、強力に術者をサポートする天下無双の――――」

「・・・その悪趣味な杖は何？」

ターンは移っても、力の差は歴然だ。

あっさり言葉を遮るのは上位者の低い声だった。

「悪趣味とは失礼な。これぞ老舗メーカーの機械杖をベースに、全ての部品を素材から見直した最高の一品。さらに世界初、術式の展開プロセスを記憶領域に保持する機能を搭載と使用者の負担を軽減させる魔導演算回路を搭載！　魔力の外部供給も装弾数６発を誇る魔力弾頭を――――」

しかし、怯むことなくノリノリの月は身振り手振を交えて杖の解説を続ける。

が、硯梨には不満があるらしい。思ったことは即実行、再度言葉を途中で止めるべく枕を投げつけていた。

「凄いのは判ったから、その少女趣味全開の形について説明をね？」

硯梨が指摘したのは杖のデザインだった。

色合いが白やピンクなのは百歩譲ってまだ許せる。しかし、しかしだ、ハートマークや星形のオプションは体が受け付けない。

「だって魔法少女ですよ？やっぱりこーゆーファンシーなデザ・・・・イ・・・ンを？」

「却下、そもそもそのネーミングが許される年齢じゃないし」
「え、この形に納めるためにユニットの小型化とか血の滲むよーな苦労をですね？　久方ぶりに手を借りた仲間の罵倒も堪えてですね？　社会に出て教官やってる適齢期の魔法少女も――――」
「燃えないゴミに捨てられたいかな？」
「う、ううっ、じゃあどんな風にすれば？」
「えーと色は黒系か、塗装無しの鋼色とかで纏めて・・・形状は全面的に見直しだよ？　機能を優先したシンプルイズベスト。余計な装飾は全て取り外した杖に、ね。じゃないと突き返す」
「ど、どーしてもダメ？」
「ダメ」

別に死ぬことはないのだが、この一週間一切眠らずに杖を開発していた月の努力はばっさり切り捨てられていた。
何というか全力を尽くして高機能化を進めた結果、余剰スペースの無いカツカツ設計が恨めしい。
どう再設計するにしても、これではまた相当な苦労確定だ。

「はぁ、なら卒業は延期。コレがないと硯梨は小学生以下のスペックで、さすがの余とて不安なのです」
「うん、判った。なら時間も出来たし、この間を利用して戦闘用の術式を幾つか組み上げちゃうよ」
「うわーい、この娘ってば殺る気満々だのっ！」
「だって魔法使いって敵を倒す職業なんでしょ？」
「間違っちゃーいないけどのぅ・・・」
「戦うからには必勝、出し惜しみ無しの一撃必殺を常に全力で心がけるよ。獲物を前に舌なめずりするのはアマチュアだってお母さんも言ってたし」
「・・・・無謀をサポートできる機能の追加を考えんと。あやつと・・・連絡つくかのぅ」

一緒に居て飽きなくていいが、何とも愉快な娘である。
味方にしていてこの惨状。少なくとも敵には回したくないと真剣に思う月だった。

「では記憶媒体を置いていこう。満足できる式が組めたらどんどん登録するのだよ。ちなみに使い方は至って簡単。何せ現代の最先端をブッチギリ。アステカ時代にゲットしたオーパーツを組み込み、さも当然のように生体リンクを採用しているからのぅ」
「？」
「え、えーとですね、これは硯梨の思考を感知する杖のコアユニットです。完全自動で様々な処理を代行するＰＣで言う所のＣＰＵとＨＤを一緒にしたよーな機械で判るかの？　今は入力のみじゃけど、本体に組み込めば出力も思いのままだよ。ふふ、思い出せば懐かしい。あのなんたら星人共は息災かのぅ・・・」
「本当に月ってさ、ファンタジー世界の生き物かと思ったら容赦なく科学寄りだよね。何か間違ってない？」

基本的に理屈に基づいた言論の多い月は、例え魔法を使用する時であっても神秘を切り捨てている。
炎を生み出してみれば電子レンジの応用と言い、何者をも通さぬ障壁を展開した場合も大気を超圧縮と言う。
これでは妖怪の類と言うよりは、どこぞの研究期間から逃げ出した実験動物の方がしっくり来るのではなかろうか。

「いやいや、魔法も科学も突き詰めればいかに効率よくルールをねじ曲げるかに尽きる。例えばテレビ、デジタル信号を受け取って映像を映し出すと言われても実際よく判らないじゃろ？　行き過ぎた科学は魔術であり、理解できない科学は魔術なのだよ」
「そうかもね。うん、納得。色々とダメダメな月だけど、人に物を

教える才能は凄いって素直に思うよ、私は」
「あの、それって褒めてるのでしょーか！？」
「多分」
「・・・・」
「む、無言になられても困るよ・・・・私、何か悪いこと言った？」
「・・・・無自覚の悪意が一番タチが悪いと余は思います」

一応の抵抗を試みる月だが、この程度で考え直す相手ではないようだ。
ジト目の圧を物ともせず、天然娘はベットに潜り込んでいく。

「せっかく月が用意してくれた道具、無駄にしないよ。明日には結果を出せるように術式の構築に集中するね」
「え、余の視線はスルー？と、それはつまり明日までに仕上げろと？」
「外装をちょこちょこーっと弄るだけなら時間は必要ないんじゃ？」
「おま・・・今時そこいらの玩具だってそんな単純には――――」
「だって神様でしょ？　まさか無理とは言わないと思うんだ」

都合の良いときだけ神様扱いは止めて頂きたい。
これは殺し文句だ。否、と首を横に振ればそこで神様扱い終了である。
本来なら二つあるはずの選択肢は、この時点で一つしか残されていなかったりする。

「せ、せめて学校から戻ってくるまでの猶予を頂きたいっ！」

返事は柔らかな笑顔と一本だけ立てられた人差し指だ。
深読みしすぎかもしれないが、暗に”男に二言は無いよね？嘘ついたら折檻タイムだよ？”と言われているような気がしてならない。

「硯梨ってば忙しいはず！　余も一分一秒が惜しいデンジャーな感じです。明日の再開を楽しみにしとるよ、じゃっ！」

限られた製造時間を無駄には出来ない。プライドと存亡を賭けた戦いが始まった瞬間だった。

そして残された硯梨もまた効率よく時間を使用するべく目を閉じ、ベッドに横たわるリラックスした体勢で宣言通りの魔術構築を始める。

（肉弾戦での勝率はゼロと想定、アウトレンジからのを狙撃を主軸に据え・・・・）

脳裏に浮かび上がる処理ウインドウを直感的に使いこなし、硯梨は一人前の魔法使いになるべく術式を練り直していく。

成る程、このサポート能力は素晴らしい。手書きで記述すると半日がかりのマルチスペル構築がテスト込みでサクサク進む。

欲しい情報を一瞬で呼び出せ、一度関与した式の追加・修正も当然容易。何というか、もう手放せない。

（プランＢ－２の一部を弄って距離による威力減衰を概念で補助。高威力射撃のリソースを確保しつつ、接敵されない対抗策も考えないと）

三次元的な戦いをイメージし、思案するのは戦闘スタイルだ。

しかし硯梨は一般的な魔法使いの戦い方が判らない。

森で出会った退魔師とやらは刀と拳銃を持っていたが、月が瞬殺したためアテにはならないのである。

故に行き着く先は趣味のゲーム情報。

例えばオンラインゲームでは、頑丈で殲滅力もある騎士を壁にし

て敵の射程範囲外から一方的に攻撃できるスタイルを確立している。
これは最も愛するＳＴＧにも通じる戦術で有り、鍛えていない華奢な体との相性も良いはずだ。

（そっか、連射の効く誘導弾を構築すれば問題はクリア。倒し切れればそれで良し、威力不足でも時間は稼げる）

その発想は間違いではない、間違いではないのだが、何処までも独自路線へと突き進んでいる事実を硯梨は知らない。

（魔力消費量の最適化は・・・・っと、もう朝？）

気がつけばカーテン越しの外が明るい。白んだ空が朝の訪れを告げ、夜の終わりを五感に訴えてくる。
すっかり徹夜してしまった硯梨だが、それは隣も同じらしい。
偶然聞こえてきたのは月の声だ。
それも”ふわぁ、結局フレームから作り直し。まだまだやらにゃーならんことが山積みだのうぅ・・・”
と、術式が八割方の完成を見せた少女とは違う愚痴がである。

「・・・・ごめんね、今度ちゃんと埋め合わせするから」

思わず手を併せて拝む硯梨だった。

「さて、私は登校の準備。今日は帰宅後のお楽しみもあるし、頑張っていこう！」

いつも鳴る目覚ましのスイッチを切り、うーんと軽く一伸び。
最低限必要な要素を満たし、晴れて魔法使い・・・と言うよりは何か違う存在を目指す硯梨の新しい一日が始まるのだった。

第二話　魔法使いの産声（後書き）

蛇さん受難の日々開始。

目指せ週一以内更新。

第三話　硯梨と愉快な仲間たち

草木も眠る丑三つ時。
街灯のぼんやりとした光だけが見守る闇の世界を一匹の化け物が闊歩していた。
教え子の注文に応え、一度組み上げた魔具を再構築するのは愉快と同時に面倒臭い。
故に蛇の王は淀んだ頭を一新すべく、獲物を探して唯進む。
そして、自らの感覚に従い見つけ出したのは一匹の異形だった。
外見上は人のように見えるが、その身から漂う気配は人にあらざる者。
おまけに食事中だったのか、抱きかかえた女の首筋に牙を突き立てていたりする。

「昔、大陸で見かけたことがある。アレか、お前は血を吸う鬼かね？」
「何だ？　人ではなさそうだが、我に何か用か？」
「とりあえず膝を付け。神を前にしての不遜な態度、今なら大目に見よう」
「・・・見なれない種だが、２００の齢を数える我に向かって何を言う」
「何だ、若造ではないか。若輩故の無礼ならば一度までの無礼は許そう。しかし、今は些か機嫌が悪い。最後の警告だ、地べたに這い蹲り許しを請え」

傲岸不遜の物言いは、吸血鬼のプライドを逆撫でするものだった。
吸血鬼は長きを生き抜いた夜族として絶対の誇りを持っており、売られた喧嘩を聞き流すことは出来ない。
故に本能の赴くまま食べかすとなった女を投げ捨て、身の程を弁

えない馬鹿者に己の力を解き放っていた。

「夜の王に対する分不相応な物言いを胸に抱き、消失しろ」

“吸血鬼”という種に備わった能力の一つ、対象を意のままに操る念力を起動。

対象は月の一部ではなく全身だ。原型をとどめぬよう圧殺し、格を見せつけてやろうとの考えである。

「・・・世が世ならば余の姿を見ただけで皆が平伏したものだ。時の流れとは残酷であり、刻み込んだ恐怖すら失わせる最強の力だのう」

神級異形は、人の信仰、畏怖、といった人が生み出す想いが積もり積もって形になり発生するパターンと、月のように元となる異形が最初から存在した上で伝説や神話が後付で付与され神性を得る二つのパターンが存在する。

故に神の祖先の意味を込めて”神祖”。

最上位の化け物にのみ与えられるランクが存在しているのである。

そんな彼らに共通するのは高いプライドだ。

立場をわきまえぬ愚か者を処分するのに躊躇いがあるわけもない。

とはいえそこらの吸血鬼如きに本気を出すのも大人げない。

一撃で捻り潰すにしても力で挑まれたなら力で返礼、それが上位者の礼儀か。

そこで久しぶりに固有能力を起動する。

“概念創造”始動。対象概念“念動力”を定義、術式として通常発動開始。

「なっ、我の力が押し返され！？貴様っなにも――――べりゃ」
「悪いが興醒めだ、四桁も生きていないガキに用は無いのだよ」

不可視の力を全く同じ能力で打ち負かし、吸血鬼が望んだ結果を叶えた月だった。
ただし威力が違う。敵とも呼べぬ小物は単純に潰そうとしただけだが、こちらは物理法則を超えた力で体を押し潰し続ける事を止めない。
狙うのは質量を無視し、一滴のしずくへと圧搾する極限領域だ。

「・・・・むぅ、硯梨用の獲物を捕獲するつもりが殺ってしまった。だが問題あるまい、まだまだ予定時間まで猶予はある」

水滴が地面にこぼれ落ちるのを見て、しまったと反省する月はどうしたものかと黙考。
この町は地脈のバランスが酷く崩れており、簡単な探査式を放っただけでも三桁近い異形を補足している。
しかし杖の性能テストと、教え子の考えた机上の空論を試すに相応しい獲物はさほど数が居ないのだ。
なにせ条件が”月の命令を理解する知恵”を持ち”下級術式程度で沈まない耐久力”を備えたそれなりの異形である。
売り言葉に買い言葉でうっかり倒してしまったが、吸血鬼は妥当な線的だったりする訳で。

「やはり打たれ強さに定評のある鬼が手頃。うむ、そうしよう」

一人呟き、その気になれば助けられる女を無視して月は動き出す。
ひょっとすると硯梨は勘違いをしているかも知れないが、神と名乗ろうが所詮は異形だ。人間など虫けらと同じなのだから当然だろう。

人間が家畜を愛でるように、気に入った個体へ多少の便宜を図る事は確かにある。
が、それは例外でしかない。所詮、種族の違いはどうしようもない真理なのだから。
さて、それはともかく腹が鳴って仕方がない。
旨そうに血を啜っていた小僧のおかげで、懐かしい珍味への食指が止まりそうになかった。

「どれ、硯梨に人を食わぬと公言した手前・・・魔法業界人でも喰らうか。人とは魔力を持たぬ者の事、ならばあの連中は人ではあるまい」

宣言を守るのは神として当然だ。
しかし、解釈の違いくらいは許されて当然だとも思う。
特に仕事がせっぱ詰まれば詰まるほど、余計な欲に流されるのは人も異形も同じなのだ。

「証拠を残さぬよう注意を払うとしよう。あの娘は久しぶりのお気に入り、万が一にも嫌われてはつまらん」

元々の予定に組み込まれていた夜食も決まり、月は上機嫌に空を見上げた。
煌々と看板が輝く牛丼屋も気になるが、飽きたと言っても口慣れた人の子も悪くない。
黒い闇に浮かぶのは己の名の由来となった衛星だ。
七夜月とは7月の月の別名であり、生命が輝く夏の夜を照らす夜の王。
ならば今この時、王として民を自由に扱って何が悪かろうか。

「さて・・・街の掃除を兼ね、夜の世界を散策するかのぅ」

腹を満たした後は鼻歌交じりに黒澄家へとこっそり戻っていた。
どうも上から目線がまずかったらしく、思わぬ数の異形を倒して回る羽目になったのはご愛敬。
もっとも少なくない人間も犠牲になっているので、正義の味方の所行というわけでもないのが実に月らしい。
おかげで作業時間が押している。かなり窮地な感じが否めない。

「抜き足差し足・・・必殺ステルスモード」

就寝中の一家を起こさぬよう気配を断ち、しかし軽口を漏らしながら階段を上る。
久方ぶりにハシャいだおかげか杖の再設計案も浮かび、何とも言えず上機嫌。
今ならどんな目にあっても笑顔でスルーできる自信が漲る月だった。

「ふわぁ、結局フレームから作り直し。まだまだやらにゃーならんことが山積みだのうぅ・・」

弟子の部屋の前を横切る際ついつい愚痴っぽい事を呟いてしまったが、きっと寝ているので大丈夫。
正確には愚痴ではなく、わざわざ買ってきたパーツ数の多いプラモを作る上での武者震いに近いのだ。
例え聞かれたとしても何ら問題はない。
月はそんな事を考えながら自室へと戻ると、物質の最小単位にま

で分解した魔導杖を前に座り込んで思索に耽る。
出かける前に依頼していた特殊部品は帰り際に受け取ってきた。
コレを採用すれば性能は段違いに上がる反面、システム回りの見直しが必要となってしまう。
はっきり言って面倒くさい。しかし、元来文化神の一面を持つ月は本能に従うようにあっさりと決断する。
残り時間は約２４時間。全力を振り絞れば何とかなるはずだ・・・と。

「・・・目指すレベルは神器級。人が三日で城を造るのならば、余はその１／３の時間で十分」

こうして誇りをかけた、類を見ない突貫作業が始まるのだった。

＜蛇神と少女の幻想曲～第三話～　硯梨と愉快な仲間達＞

朝焼けに染まる赤の世界。
しかし圧倒的な朱の色に染まらぬ白い影があった。

「第１６次テスト開始。残存魔力を使い切って誘導属性を付与」
『汎用砲術“天弓”、ランダムバーストから、パッシブロックオンに変更』

意志を与えられた白の持つ杖が淡々とベースフォーマットへの機能追加を告げると、放たれるのは幾つもの光だ。
光は鋭い先端を持つ光の矢であり、その数は5。
見た目には幻想的だが、その速度は雷光の如く疾駆する純粋な破壊を秘めた攻撃術だった。
続いて光の矢は瞬きも終わらぬうちに弧を描いて着弾、硯梨のデビュー戦の締めを飾る赤鬼を地に伏せさせる結果を生んでいる。

「仕上がりは上々かな。メインに使う術式にしては良い出来だと思わない？」
「うむ、威力も十分、詠唱も皆無と悪い点は見あたらないが――――」

暇つぶしに持ってきた携帯ゲーム機から顔も上げずに月は続けた。

「余が見繕ってきたラスボスはタフが売り、きっちり止めを刺さない限り何度でも立ち上がるのだよ」

見れば、鬼は何もなかったかのように起き上がろうとしている。
肉を刮ぎ落とし、腹には炭化した焦げ後が残っているにも関わらずだ。

「うわぁ、これだけ撃ち込んでも倒せないなんて頑丈を通り越して化け物・・・って化け物なんだっけ。でも逆に嬉しいかも。色々と・・・試せるし」

杖の先端を鬼へと向け、硯梨は脳内で術式を組み立てる。
まずは先ほどのワンショットで使い果たした魔力を再チャージ。
組み込まれたリボルバー式の機構を稼働させ、装填してある弾頭

から魔力を吸い出して排出する。
空の薬莢が地に落ちれば杖のコンデンサーに魔力が満ち溢れ、戦う準備は十分だ。
これぞ月の考案した、”燃料がないなら他から持ってくればいいじゃない”機能である。
術者はライターの火打ち石の如く、起点となる些細な魔力さえあればＯＫ。
後は供給された魔力を自らの物として使い回すだけで実にらくちんなのだが、一つ落とし穴がある。
外部供給された魔力は例えれば無色。使い手固有の色を持っていない。
そこをうまく本来自分が持つ魔力の色に馴染ませる制御力がなければ、異物でしかないのだ。
が、そこは適応力の高い硯梨さん。
無駄に高い制御力で苦もなく使いこなしていたりする。

「ほれ、そろそろ回復が終わるのぅ。受け身のままでは終わらんよ？」

しかし硯梨は動かない。鬼の一挙一動を見逃さないよう集中して構えるだけだった。
すると鬼も好機と考えたのだろう。今までは機先を制する弾幕のせいで一歩も前に出ることが出来ず、溜めてきた苛々を発散すべく跳躍。
己の武器である強靱な四肢、中でも粒々と筋肉の盛り上がる腕を全力で振り上げていた。

『常駐術式“運動系数改変”を二倍で定義』

しかし鬼の一撃は地面をえぐるだけで少女には届かなかった。

術式により本来の身体能力を二倍に強化した硯梨は、余裕の足捌きで剛風を回避。
故に鬼との距離はほぼゼロ。この間合いでは鬼の方が有利にも関わらず、硯梨は距離をあえて取らない。
破壊が産む風が場に似つかわしくない白のワンピースを靡しても、この場の支配権はこちらが握っている。

「うんうん、対クロスレンジ用も絶好調。これを使いこなせば今後役に立ちそう」

魔法とは何と便利な力だろうと硯梨は思う。
敵に対しては矛となり、自らには盾となるこの力。
非力な少女では間に合わない動きも、己の身体に能力を付与するだけで不可能が可能になるのだから面白い。

「チャージタイムも稼げた・・・少し大きいの行こうか」

加速された体は、それ以上に高速演算を続ける脳の命令に遅れなく反応。
この一撃の為、リスクを抱えてでも的を不利な間合いに呼び込んだのだ。
硯梨は威力を増幅する魔法陣を杖と鬼の僅かな隙間に展開し、薬莢を排出してさらに魔力を補充しながら一呼吸。
数で押す事を主軸とする汎用式とは違った、一点集中、一撃必殺に重点を置いたとっておきの切り札を起動していた。

「これが最終テスト！」
『発動シークエンス開始。収束・増幅用魔法陣展開クリア。効果発生部位にエラーを三カ所検出も補正完了。ですが――――』
「ですが？」

『魔力の過剰供給によるオーバーロード発生。バックファイアが予測されます』
「この際ＯＫ、処理続行！　多少痛くても耐えれば良いだけっ！」

術者の覚悟完了。
ならば、と杖は己の責務を全うするべく肥大する主人への負荷を無視して術式を展開。
計算によるとボクサーの拳に匹敵するダメージを硯梨に与えることになってしまうが、ゴーサインを出された以上、敵の撃滅こそが主の本懐だ。
何よりこれはあくまでも実戦テスト。問題を洗い出し、その身で味わってこそ意味がある。

『了解、広域型砲術“雷神槍”起動』

そして破壊の光が産まれる。密着した零距離射撃は人の背丈程もある極太の閃光は堅牢な防御力を持つ鬼をあっさり貫くと、傍目にも暴走しているのが判る無軌道さで周囲を破壊する。
収束しきれなかった一部は川に着弾すると水を沸騰させて盛大な水柱を上げるわ、こっちを見ていなかった監督役にはとばっちりを食らわせるわ散々な結果である。
ちなみに反作用で気絶した硯梨は知る由も無かったが、今回の鬼は首を落とさない限り死なないと言う属性を持っていた。
そのため胴体を丸ごと奪ったにも関わらず再生を始めており、一人で対峙していたなら命はなかっただろう。
が、そこは保護者同伴。流れ弾による怪我もなくピンピンしていた月が一瞥すると、鬼は存在を抹消されていたりする。

「ギャーッ！？　余のポケモンのデータがー！？　大会用に育てたミロカロスがー！？」

『ピンピンしていて何よりです。と言うか、電子制御が可能ならば好きなようにチートすれば良いのでは？』
「判ってないのぅ、努力に運が絡む物を好きに弄っては面白くないのだよ。望んだ結果を必ず手に入れられるからこそ大事なのは過程。人が無駄という部分にこそ価値を見いだすのが余なのです」
『そんな創造主だから、私にも無駄と切り捨てられる機能が山積みなのです。マスターは尖った性能大好き、余分な機能があるならリソースを他に回せと言い張る御方ですよ？ワンオフの専用機として私が設計されたなら、失敗作の予感がします』
「辛口なＡＩだのー。奴に任せたのが間違いだった！性能はともかくアクが強い」

月は急遽搭載を決めた杖の人工知能を知己に任せたことを心底後悔していた。
いかに時間が無く向こうの方がこのジャンルでの実力が上だとしても、相手の性格を予想してしかるべきだった。
しかし時遅し。今更変更するのも面倒＆機能的には問題が無いのでは諦めるしか他にない。

「まぁ、非観せんでもよい。お主は現時点で人の作る玩具とは比肩できぬスペックを持ち、成長進化すら可能な傑作なのだ。称えられるいわれはあっても、貶されるいわれは断じてない。余が保証しよう、まだ名も無き神器よ」
『そうですか。では、安心してマスターの剣となりましょう』
「杖だがな」
『言葉の文です。私は手始めとして世界最強の頂きに上り詰める予定の杖、野蛮な剣なんぞと一緒にされては心外だと判断します』
「いきなり目標高いのぅ！？」
『神が保証した傑作なのでしょう？　それくらい当然です。むしろ全銀河にすら範疇を広げてもいいくらいと思いますが』

「あー、頑張れ。余は正直ついていけません」
『ついてこなくて結構。さて、そろそろマスターを起こしましょうか。創造主、宜しくお願いします』
「仕方がない、起きろー起きるのだーすーずーのじー」

月は目を回して伏している生徒を抱き起こすと、ぺしぺしと頬を叩く。
反応が薄いため一応身体の異常を探査式で探ってみたが、何処にも問題が無く一安心。
そこで肩を強めに揺すり覚醒を促した所、ようやく意識が戻ったようだ。

「あうう、寝違えたみたいに首が痛い・・・・あ、鬼は！？」
「余が潰しておいたから安心するのだ。とゆーか、杖が警告してるのに無理はいかんよ」
「だって絶好のチャンスだったんだよ？　何度でも同じ選択をするね、私は」
「その突貫精神はヤバイと思うんだがのぅ・・・支援担当としてはどうなんだね」
『マスター、一か八かではなく確殺の方向で戦術を煮詰めましょう。でも、私は多少のリスクより好機を選ぶ考え方は嫌いではありませんよ』
「だってさ」
「渡して間もないのに、速効で飼い主に似てきとる！？」
『褒め言葉と受け取りましょう。それよりもお時間です。登校の準備を全てクリアするには３２分１６秒以内に自室へ戻る必要があると判断します』
「もうそんな時間？　急いで帰ろっか」

昨晩から開始した実戦テストも、気がつけば日が昇ってしまって

いた。
一晩中の魔力運用は相当の疲労があるはずだが、それを感じさせない元気な硯梨を見て月は思う。
いかに魔力は外部供給といっても扱う術者にはそれ相応の精神力と集中力が要求されるのに、見た目に寄らずタフな娘だ。
確かに掻き集めたのは雑魚ばかり。しかしけろっとした顔で初戦にも関わらず撃破数１０、これは凄いを通り越して異常としか表現出来ないと。
しかし一番恐ろしいのは、別種族であろうと躊躇いを見せずに命を奪うその精神だ。
普通は生殺与奪を得ることに怯え、恐怖から錯乱することもあるだろうに。
少なくとも、月がかつて見た戦乱の若武者達ですら初陣で縮こまる者も多かったはずである。

「あー余は朝飯を食べてから戻る故ここで解散。この辺の異形は根こそぎ葬ったといっても、気を付けて帰るのじゃぞー」
「はいはい、お付き合いありがとね♪」
『創造主、帰路の安全確保はお任せを』

月はぺこりと頭を下げて自転車を走らせていった硯梨を見送ると、指を一つ鳴らす。

広域付与概念“人払い”及び“遮音”並びに“認識阻害”解除。

今も昔も変わらず、対異能の組織は五月蠅い物だ。
昨日の晩に退魔の者たちを踊り食いしたが、口を揃えて“魔を秘匿しろ”、“異形に与するものは敵”と、まるでオウム。
そんな連中に気づかれては面倒なので、わざわざ隠蔽式を展開していたりする。

月は己の欲求を何一つ我慢するつもりはない。しかし、無駄な手間もかけたくないのも本音。
自分はいい。人の子をいくら引き連れてきたところで、最悪姿をくらませばそれで済む。
だが、硯梨は違う。あの娘は壊れてしまうかもしれない。否、絶対に命を落とすだろう。
それは不愉快だ。故にこうして多少の手間を惜しまない月である。

「・・・アンデスにいた頃の余なら被害など二の次に突貫していたか」

世界を一周した後、最後に落ち着いたこの小さな島国で少しばかり自分は変わったのかもしれない。
その変化を起こした人間の事を思い出し、次に現在進行形で影響を受け続ける少女のことを考える。

「しかし、まだ穴だらけでも応用スピードが並ではない。これは末恐ろしい魔法使いになるだろうよ」

抉れた土手、ひしゃげた欄干を見る月は嬉しそうに目を細めるのだった。

一月明学園、昼休み一

硯梨は微睡みの中にいた。
昨夜からの疲れからなのか、今までどのように過ごしたかも判らない。
そんな中、音が聞こえた。
聞き覚えのある一定のリズムに意識が半分覚醒し、続いて脳裏に響く淡々とした声で目が覚める。
目を擦って状況確認開始。ふと気が付けば昼のチャイムが鳴っていた。
思い返せばここは今年から通っている公立の高校、月明学園の教室だ。
音から察するにどうやら昼時らしい。

『マスター、消費したカロリーを補う時間です。探査式によると調理パン系は全滅、コッペパンの残数すらも・・・たった今ゼロに』
『幾ら折り畳めてコンパクトでも、鞄の八割を食う君のせいでお弁当を持って来れなかったんだけどね。はぁ、私はこっちの対策考えないと・・・・』
『ところでマスター、そろそろ私に名前を頂けないでしょうか？型式番号すら持たぬ身では、アイデンティティーが確立できません』
『言われてみればその通り。実働テストに夢中で考えてなかったよ。本当は午前中で決めようと思ったのにこの有様なんだ。ちなみに何か希望はある？』
『では、創造主に肖ろうかと。９月が生み出した存在たる私はさしずめ１０月。神無月で如何で――――』
『もしも無いのなら黒いんだし、クロで』

硯梨にセンスは皆無だった。
ちなみに自称神無月は、制御ＡＩの本体たる結晶体の青を除けば

つや消しの黒一色。
注文通り露骨な装飾は排除されていても、細かな部分には名残なのか妥協点なのか精緻な彫刻が刻まれた格調高い杖である
一度は制御ＡＩを搭載せずに完成したが、最終的な改修作業により主人を公私に渡りサポートする杖となっていたりする。

『拒否します。神の加護すら必要としない私には神無しの月ぴったり。元より死角無しの最強ＡＩですし、今後は創造主に頼らぬ意味合いも込めて一文字削り“神無”と名乗らせて貰います』

ずいぶんと大口を叩くが、それは己に搭載された特殊機能の有効性を理解しているからだ。
機械式の杖はカタログが出回るほど種類があるらしいが、どれもこれも簡単な弾丸状の媒体から低級術式を解放するだけの物である。
それに対し、神無は毛色が違う。
主に代わって己のみで術式を組み立てる”詠唱”に、即座発動が必要な物を事前詠唱で保留しておき瞬間解放する”常駐”。
さらには一度構築した物を記憶領域に登録し、処理の大半を圧縮言語に置き換えることで使い手の負担を軽減する”代行”と多岐に渡るを備えているのだ。
これだけの性能にＡＩの性格が誇り高い事も併せれば、唯我独尊なのも仕方がないだろう。

『主が可愛い名前を考えてあげたのに・・・月といい、神無といい・・・何が不満なのかさっぱりだよ！？』
『ハイセンスすぎてちょっと、否、かなり重いと判断します』
「うう、納得が・・・世界が私を認めてくれないって・・・・」

机につっぷしながら鞄に仕込んで持ち込んだ神無と思念通話でやり取りを行っていた硯梨だったが、気づかぬうちに声に出していた

らしい。
　そのことに気がついたのは、まるで危ない物を見るかのような目で怯んだ友人が頬を引きつらせていたからだ。
「す、すずさん？　ストレスが貯まってるなら遊びに行く？　一杯奢るよ？」
「？」
「真面目な子ほど思い詰めたら危ないって言うから、お姉さん心配だ！」
　オーバーアクションで泣き真似を続ける中学からの親友、羽久いずもの奇行の意味をようやく悟った硯梨は慌てて立ち上がって言った。
　ちなみに年上を気取っていても年齢の差はゼロ。僅かに一ヶ月ばかり速く産まれて来ただけだったりする。
「えー、ええと、夢？　ちょっと変な夢を見ただけだよ！？」
「ジーザス！　夢は人の願望の現れだっ！　世界を憎むイコール今の生活に不満があるって事じゃんか。非行ダメよ？すずには空気が読めなくても素直なままで居て欲しいとあたしは思う」
「あーうん、落ち着こうね？」
「これが落ちついて居られるだろうか、答えは否っ！そうだろみんなっ！」
　やおら机に飛び乗り、人差し指を天に突き上げたいずもは意味不明なアジを開始。
　普通はスルーされる所だが、硯梨の在籍するこのクラスはノリの良い奴らばかりである。
　中でもいずもはその筆頭で、半分混じったアメリカ人の血を証明する赤毛は簡単に火がつく証だ。

一般的にハーフは美形が多いが、この娘もまたご多分に漏れない快活系美人さん。
性格もざっくばらんな気さくさで男女を問わず人気を持っている。
そんな事実上のクラスのリーダーが同意を求めればどうなるか？
答えは簡単。叩けば響いて当然、そう言わんばかりの返事が矢継ぎ早に飛び込んで来るのだった。

「黒澄さんは天然が良いんだ！　路線変更は困る！」
「そうそう、すずは自分で気がつかない愉快な発言で笑わせてくれないと！　頼んだノートの科目を間違えるとかさ！」
「不良になったら宿題移して貰えなくなるから勘弁してーっ！」

次々に上がるブーイング（？）。初めのうちは窘めていた硯梨だが、目の前のアジテーターを筆頭に話を聞かないクラスの仲間に業を煮やし始めたようだ。
次第に浮かべていた困り顔に凄みが増していき、比例するようにして瞳に炎が宿っていく。

「・・・人の話・・・・・聞こうよ」
「いやー、盛り上がってきました。この勢いで放課後は有志を募ってフィーバーだ！　十万億土の彼方へ行きたい奴は予定を開けとけーっ！」

空気の読めない親友の姿を見た瞬間、沈黙を保っていた神無は聞いた。
人間にとって大切な何かがブチンと切れてしまった音を。

『マスター、どうして魔力検出が？』
「ええと・・・”空気”、”圧縮”、”解放”、”伝播”を結合」
『しかも私を介してもいないのに無闇やたらと詠唱が速いのは――

――』

不可視設定で展開された魔法陣が瞬時に処理を代行。
まるで突然トンネルに放り込まれたような気圧変化が起こり、教室の中央に圧縮された空気の塊を産んでいた。

「あれぇ？　鼓膜に妙な感覚が？」

急激な環境変化に驚き何事かと首を傾げるいずもは、しかしその思考を奪われることになる。
硯梨がゆらりと突き出した腕。その先端で広げられていた五本の指が一斉に拳を形作った瞬間、最後のトリガーが引かれていた。

「・・・即興構築“音波の炸裂”」

強力な意志力によって形作られた圧搾空気が弾け、無音の衝撃が教室中を蹂躙する。
さすがに我が身だけは平行して展開した障壁で守ったが、頭に血が上った硯梨に無関係な級友をその範疇にいれる考えは存在していなかった。
しかし、例外もある。
これは咄嗟のことで範囲設定が甘かったのだろう。どうも防御圏内に一番黙らせたかった諸悪の根源を巻き込んでしまったらしい。

「す、すずさん？　何をしたのかなぁ、とお姉さんは聞きたいような、聞きたくないような葛藤中だ。なんか教室が死屍累々、いきなりみんなだけがなぎ倒されたのは錯覚？」
「あはっ、日本語の通じない親友は何を言ってるのかなぁ？　とりあえず、その手にぶら下げてるサンドイッチを寄越すのが平和的解決への道じゃないかと思うんだよね、私は」

「イエスユアハイネス！　献上品にございます。ところでコレは何事？」
「人間素直が一番。さすが長年で培ったツーカーの仲！」
「何かやったな！　否定しない所を見るとオマエが何かやったな！？」
「むぐ？　飢えた私の邪魔をすると、痛い目を通り越した“生きて御免なさい”的な何かを――――」
「普段大人しい癖に、怒ったら手段を問わない武力行使に走るのはやめようよ・・・・」

今は話題を逸らすべきと判断したいずもは、妙に普通のコメントで場を濁す作戦に出ていた。
が、場の平穏を望む友の心中など気づきもしない硯梨は謎の自己弁護を始めるからタチが悪い。

「うちの家系じゃ普通だよ？　むしろ聞いた話が本当なら、私は限りなく穏健派だもん」
「・・・そーいえば前に言ってたわね。おばさんは紛争地域を徒手空拳で渡り歩いてたとか、婆ちゃんは戦中に弓矢一本で高々度のＢ－２９を撃墜したとか眉唾物の話をさ」

いずもも面識のある硯梨の母は穏和で綺麗なおっとりさんでなので、正直なところガセだと思いたい。
しかし、過去に一度だけ見た光景が１００％笑い話と一蹴できないから恐ろしい。
アレは忘れもしない黒澄家の日差しを遮るビルが作られ始めた時のことだ。
遊びにいった際に骨組みも出来上がったビルを見上げ確かにこれは暗いなぁと思ったが、翌日忘れ物を取りに再度訪れたところビルが爆破テロでも受けたかのように半壊していた。

これは何事かと唖然としていると、丁度買い物に出かける雅美にこう言われたのだった。

“一度だけ警告はしたのよ？　でも、無視されたから打ち抜いちゃった。ずっと使わなくても染みついた技は忘れないみたいで一安心かしら”と。

何を？　打ち抜く？　どうやって？

ツッコミどころは山のようにあったが、笑顔なのに一切笑っていない目をみると口を挟めなかったいずもである。

「せっかく見た目が深窓のなんたら風味なんだし、中身も外見に合わせようよ。そんな“ミサイルに比べたら拳銃なんて玩具だよね”的な逃げは止めてさ！」

その後のニュースで不発弾が埋まっていた為に起きた事故と報じられ、やっぱ冗談だったと胸をなで下ろした過去が微妙にトラウマだ。

親友にはか弱い女子高生を目線で震えさせるような大人には育って欲しくない、と切に祈る少女は自分のダメさを棚に上げて続ける。

「話が逸れたけど、そろそろ休み時間も終わるからお小言終了。でも必ず後で根掘り葉掘り聞くから首を洗って待っときなっ！」

その言葉通り、舞台の幕引きを告げる鐘が鳴る。

硯梨もいずもになら魔法の存在や、実は化け物ってゴロゴロしてました、と言う精神科を紹介されてしまいそうな事実を告げてもいいと思う。

なにせ愉快なこと大好きな娘だ。あっさり信じた挙げ句、嬉々として首を突っ込んでくるに違いない。

しかしそうは思っても事を性急に運ぶ必要は無いだろう。
昨晩から今朝にかけてのデビュー戦を序章とするなら、魔法使いとしての物語はまだ始まっても居ない。
何を目指せばいいかまだ判らないが、それもまた技量を磨く間に見つかるはずだ。
胸を張ってソレを言えるようになったなら――――。

「おーい、気持ち悪いくらい静かだな・・・？　何事！？」

一言だけ言っておこうと思った矢先だ。
授業に現れた教師が惨状に気づき、それどころではない空気が流れる。
この後、何らかのガスによる被害と勘違いした学園によりちょっとした問題が起きるのだが、汗を一筋垂らす硯梨と、何かを察したいずもは

“気がついたら皆が倒れてた。私達が最初に気がついたらしい”

と一切合切を丸投げにして事態を回避。
そしらぬ顔で被害者を演じたのはまた別の話である。

第三話　硯梨と愉快な仲間たち（後書き）

少しずつ主要メンバーがちらほらと登場。
主人公より書きやすいいいずも先生は、一般人代表のポジションを守れるのでしょうか（ぁ

第四話　誤解から生まれる物語

その日は“仕事”も無く、半ば遊びの部活も休みで穏やかな一日のはずだった。
しかし、その予定もつい先ほど費えてしまったから質が悪い。

「・・・っ！？」

気づかれないように驚きを噛み殺し、焦る心を押さえつけながら考える。
見てしまった光景はルールに反する物だ。むしろ制裁が必要になる可能性すらあるレベルの事件である。
魔法を堂々と一般人の前で使う・・・これは組織に籍を置く立場として規律を守るためにも、上へ報告を行い適切な処罰を下さなければならない。
が、相手は無下に出来ない間柄。何とかもみ消したいところである。

「あいつは・・・・くそっ、いつの間にこっち側へ踏み込んだんだ」

相反する立場が拮抗し、最終的に勝利したのは私事だった。
幼馴染みにして後輩、羽久いずもを見捨てるわけにはいかない。
それが例え背信行為であろうとも、譲れない物は譲れなかった。

「授業が終わったら呼び出すか。ったく、厄介事の権化だよ・・あいつは」

<蛇神と少女の幻想曲～第四話～　誤解から生まれる物語>

集団昏倒事件も“色物が揃ったあのクラスじゃ仕方がない”と華麗にスルーされ、最終的に事件へと発展しなかった２－Ｂ。
授業の時間が減ってラッキー的な意見が大多数を占めるのは如何な物かと実行犯は他人事のように思うが、面倒ごとに発展しなかったので余計な口を挟むつもりはない。

「五月蠅いのが騒ぎ出す前に帰――――」
「誰がやかましい奴だ！あたしは物静かだぞぅ？例えるなら南極のように。クールでしょ？　って、リアクション無しで何処へ行くマイフレンド」
「南極もすっかり温暖化が進み、棚氷も景気よく崩壊してるもんね。うん、自分を過大評価しない姿勢は評価するよマイフレンド！」
「いつもながら、笑顔でさらっときっついな」
「そ、そう？割と思ったことを素直に口にしただけなんだけど・・・」
「余計タチが悪いわっ！　これだから無意識の毒吐きさんは・・・」

ＨＲが終わると同時にさっさと帰ろうと画策していた硯梨だったが、やはりというか当然というか、妙な所だけ有言実行の親友にがっしりと制服の裾を掴まれていた。
この調子では逃がしてもらえる確率が酷く低そうである。

「ブツブツ呟いただけで怪奇現象を起こせるのならあたしにも教えなよ。トリックだろーが、マジモノだろーがどーでもいいわ。だって面白そう！」

あまりにも予想通りの展開に、硯梨は逆に困ってしまう。
確かに教えたところで害はないだろう。むしろ自分にはない機転と発想を持つ存在なので、術式開発の手助けになる可能性が高い。
こちらの邪魔さえしないのなら巻き込んでしまっても問題ないような気がしてならない。
しかし一応は他の意見も伺いたいわけで。

『どう思う？』
『私は足枷になると判断します。仮に戦闘時に近くにいた場合、守るという余計な手間が発生する可能性が非情に高いのではないでしょうか？』
『ん、それは大丈夫。ウチの家訓・・・と言うかお母さんの教えにこんなのがあるの』
『はて、どのようなものでしょう？』
『“戦いとは一期一会の出会いの場。障害になるのなら親兄弟でも塵芥と思え”って』
『何処の修羅の家系でしょうか？　私のデータベースによれば一般家系とはかけ離れた発現だと判断します。控えめに言って異常です、狂っています』
『うん、ちょっと独特だと私も思う』
『ちょっと、ではなく最大級にです。まぁ、この件はおいおい議題にすることにしましょう。余談ですが、私は少々マスターを真人間扱いしすぎた感があると判断します。本当に申し訳ありませんでした』
『な、何を言うのかな！？　私は何処にでもいる無個性な女の子だよ！？』

『そんなあり得ない話はどうでもいいので、今は目の前の問題を片づけましょう』
「これから末永く一緒にやっていく仲じゃないの！？　相棒の言う台詞じゃないと思わない？　ねえ、ねえってば！？」

脳内で意思疎通を行っていたのも忘れ、硯梨は神無の修められたバックをガシガシと振りながら大声で抗議をしてしまう。
しかしそれは他人から見ると奇行でしかないわけで――――
「その奇行は何っ！？　質問と答えの関連性が見えないわよ？　やっぱ、近所で評判の精神科でも紹介しようか・・・？」
「違う、違うって！？　私は壊れてないし病んでも居ないからっ！？」

自称普通の少女はやってしまった、と必死になって弁明をするが無駄である。
辺りから漏れ出すひそひそ声。ヤバイ、これは激しくマズイ事態だ。

『・・・頭に衝撃を与えれば記憶が飛ぶかな？』
『マスター、些細なことで一々武力介入していてはキリがありません。現在置かれている状況を脱するには一刻も早くこの場を離れるのが最善手と判断します』
『えーと、冗談だよ？　クラスの仲間に術式なんて使わないよ？』

神無としては否定した行為を既に躊躇うことなく行っている事実につっこみを入れたかったが、そこは硯梨のためだけに生み出された存在である。
思った事をあえて口にせず、代わりに話題を転換しようと食いついてきそうな情報をばらまくことにしていた。

『さて、こんな状況だからこそ報告せねばならない事項があります』
『何かな』
『昼に発動したアレを何者かに関知された模様。私が緊急展開した隠蔽術式に不備があったわけではなく、あくまでもイレギュラーとして捕捉されたようです。ぶっちゃけ視認対策はしていませんでしたので、当然と言えば当然の事態と判断します』
『素朴な質問だけど、私が魔法使いになったことって隠すことなの？』
『私としてはどうでも良いことなのですが、一般的な定義として“神秘は秘匿されなければならない”という概念が存在するそうです。故に術式をおおっぴらに宣伝することは、広義の意味での魔法社会に対する挑発行為と受け取られる可能性が非常に高いと判断します』
『じゃあ月は？　自称神様が普通にやりたい放題町を闊歩してるよ？』
『アレは特異な例でしかありません。野の獣に人の法が及ばないと同じく、人外の筆頭たる創造主も同様に枠の外。そもそもにして前提条件が違います』
『せっかく何でも出来る技術なのに勿体ないね・・・』
『さてマスター。本日何度目かカウントをあえてしていないアドバイスがあります』
『？』
『言葉のキャッチボールの最中に黙りこくるのは危険かと。ご友人が可哀相な人を見るかのような目でマスターを見ていますので』
『なっ！？』

興味深い話だったので、つい意識を神無に中心に向けていたのが悔やまれる。
せっかく一度は否定したのに、疑惑を上塗りしてどつぼに嵌ってしまった。

「だからあっちの世界にいくなぁ！？　話を聞いてないだろお前さん！」
「私にだって色々事情があるんだから仕方がないじゃない！　あんまり深く追求すると、今度こそ黙らせるよ！？」
「うわ、出ました豪腕発言。やっぱし何か隠してるな？　あたしの目はごまかせないぞ。さぁ、マックで尋問タイムと行こうか・・・・・」
「あ、あれ、学校が終わったらみんなで遊びに行くんじゃ？　ダメだよ、約束破るのはいけな――――」
「あんなの本気にしてる奴居ないし。そもそも同意の声が上がらなかったからさー。はい、ってことで障害無し。キリキリ歩けー！」
「何だか理不尽だよぅ・・・・・」

さすがの硯梨も悟った。この相手は何度ねじ伏せても諦めそうにない事を。
神無は秘匿しろと言うが、別に一人や二人に話したところで誰も問題視しないはずだ。
腹を割って話そう・・・・そう決めた時、何処かで聞いたことのある電子音が鳴っていた。

「悪い、ちょっと電話。はいはい、羽久・・・・何の用？　お金ならないわよ？　え、違う？　何よ。今言いなさい。ったく、貸し一つだかんね？　今から行くから何処にも行かずに待ってること！」

最初はよそ行きの声だったいずもの声が急に砕け、携帯を閉じる頃にはすっかり不機嫌になっていた。
何があったのかを察することは出来ないが、どうも嫌な予感がしてならない硯梨である。

「あ、用事？　じゃあ又今度で――――」
「さっくり終わらせるから着いてきなさい。糞馬鹿に蹴り入れたら速攻マック！」
「はぁ、仕方がないなぁ」
「うっし、ヒァウィゴー！」

いつもながらハイテンションの友に苦笑しながらも、仲良く並んで歩き出す硯梨だった。

―校舎裏―

硯梨は汗を一筋垂らし、嫌な予感が的中してしまったと首をロボットのように動かした。

「あ、あのさ、私思うんだ」
「？」
「確認するけど“幼馴染みの先輩”から“人には聞かせられない話がある”って呼び出されたんだよね？」
「うむり、概ねその通り。そこに何か問題があるというのか、すず君」
「それって俗に言う告白なんじゃ・・・・」
「無い、それは無いから大丈夫。まぁ見てなさい、どうせ鍵がない

から私の部屋の窓を使わせてくれとか、そんなしょーもない頼み事だろうし」
「うっわ、べったべたの幼馴染み関係。私はここで待ってるから行ってくるといいよ」
「あいよっ。先に帰ったら家まで押しかけるかんね？」
「はいはい、判ったから行ってきなさいな」

小走りに駆けていくいずもが遠目に見える一つ年上の男、硯梨も少しだけ交流のある登米さんちの修慈君に跳び蹴りをぶちかます姿を青春だなーと眺めていると相棒は言う。

『音声拾います。術式は探知されるでしょうが、その点私は科学と魔術のハイブリット。物理手段での機械集音を逆探知できるものならやってみろと判断します』
「盗み聞きとは悪趣味な・・・あれ、今何か聞き逃せない言葉を聞いたような？　気のせいかな？」
『術式が探知される、と言う点でしょうか？』
「そうそう。あまり付き合いのない人だけど、一般人じゃないの？」
『先ほどの報告を覚えておられるでしょうか？　姿を見られた相手が彼です。私的には敵性対象と認識しており、マスターが思うような野次馬根性で盗聴を行っている訳ではないのです』
「・・・そう・・・なんだ」
『納得して頂いたところで傍受した会話の再生開始します』

硯梨は人外以外との戦いの予感にグッと拳を握るが、今はより興味のある恋愛トークに興味津々で唾を飲み込むのだった。

―その頃―

「いきなり蹴るなよ！？　何を考えてるんだ！？」
「黙れ、あたしは忙しいの。来てやっただけ有り難いと思いなさい！」
「上から目線だなぁ・・・おい。仮にも年上だぞ？少しは敬えやゴラァッ！」
「じゃあ、例えばどんな面であたしより優れてるってのよ。いつも赤点ギリギリ、遅刻欠席は当たり前、人格的にダメ人間のくせに」
「・・・・」
「黙ってないで早く。ほら、友達を待たせているんだってば！」
「た、たとえば・・・・」
「ば？」
「って、まてぃ！？　何か話が違わないか！？　何故に呼び出した俺が説教されにゃぁならんのだ！　前から口酸っぱく言ってる通り、力業で話の流れを変えるんじゃねぇよ！？」

ああ、やっと気がついた。
いずもはそんな呆れた様子で頭を振っていた。
全ては掌の上の出来事、反応まで予定の範疇に収まっていると言いたげである。

「うっさい、からかうのも飽きたから本題をさくさく言え！」
「ちきしょう・・・・じゃあ話す。俺って、いずれは本業にしようと思ってるバイトをしてんだ。これは知ってるな？」

「マウントパンチをしても吐かなかったバイトでしょ？」
「おう、その謎のバイトなんだが、あまり人様に見られててはいけない技能がないと出来ない仕事なわけだ。回りくどいかも知れないが俺が言いた・・・・・って、人を犯罪者みたいな目で蔑むんじゃねぇ！　合法だよ！いうなれば警察の仲間みたいな仕事だぞ！？」
「五月蠅い犯罪者予備軍。さては白い粉でも売りさばくような――――」
「だぁーっ、口を開くな阿呆！もう直球でいく！　俺は関連に属する対魔師だ。こういえば判ったか？俺が何を言いたいかを」
「・・・警察行こう。大丈夫、長年の腐れ縁のあたしが一緒に出頭してあげるからさ。大麻師って直球のネーミングは組の決定？　それとも自分で？」
「・・・対魔師だと何故ポリスにお縄？」
「“大麻”を陰で売りさばく“師”とかいう役職なんでしょ？　お天道様の下は歩けない仕事だとあたしは思う。むしろ何が悪い的にポカンとしてるあんたがありえない」

おかしい、これは雲行きがおかしい。
この街で魔法サイドに転んだならば、関東退魔士連盟こと通称“関連”を知らないはずがない。
ひょっとして自分は何かとんでもない勘違いをしているのではないか？
要領を得ない答えばかりを寄越してくる幼馴染みに、意を決して修慈は言う。
「お前さ、魔法的な不思議パワー使えるようになったんだよな？」
「病院行け」

何の遠慮もなくばっさり切り捨てたれた。
オブラートに包む事を知らぬ少女は直後に握り拳を作ると、その

まま攻撃体勢へ移行。
いよいよもって頭がおかしい少年の顎を打ち抜いていた。
「その手の話はＭＭＲにでもたれ込みなさい！　用件はそれだけかっ！」
「脳がっ、脳が揺らされっ！？」
「よし、無しと。次に同レベルの電波話で呼び出したらコロース。おーけー？」
「わ、わかった。一応断りを入れておくが、俺はこの目で見たことだけを――――」
「あっはっは、地獄で懺悔しろっ！」

ごしゃ

「待たせちゃってごっめーん、お詫びに今日はあたしが奢るから許せー！」

足下に転がっていた拳大のコンクリート片を全力投擲。
電波ちゃんの腹に投射物をめり込ませ、いずもは暇そうにぼんやりしている親友の元へと駆け出していく。
残されたのは脂汗を浮かべながら両手を地面につけ、荒い呼吸を繰り返す修慈だけだった。

「お、おかしい・・・何処で何を間違えた？　あいつが俺に嘘を言うはずがないし、術者は別人なのか？　ってもあの時騒いでたのはいずもしか・・・・いなかったよなぁ、多分」

実は身を隠すことを優先したため、限定された角度からしか現場を見ていない。
しかしながら術式発生点の中心に幼馴染みが居て、なおかつ呪文

とおぼしきよく判らない言葉を宣っていた以上疑う余地はないはずだ。
まさかとは思うが、別の第三者の仕業なのだろうか。
もしそう仮定すると、無関係の少女を囮にした罠の可能性を視野に入れる必要がある。

「・・・このまま調査を続行しよう。ありえんし、考えたくもないが、あの短絡女がしらを切ってるってのもありえん話じゃない」

異形はともかく未だ対人戦の経験がない修慈だが、素人が突然力を手に入れて暴走する話はよく耳にしていた。
ある者は犯罪に手を染め、ある者はそのまま魔に落ちる・・・そんな話を。

「最悪の場合・・・・俺が・・・・」

さりとていずもに恋慕の感情を抱いて居なくとも、隣の家には色々と世話になっている。
不幸な事故を引き起こさぬため、手のかかる妹分を日の当たる世界に連れ戻さねばならない。
責任重大。誰に知られることなく、自分一人で真実に辿り着く難しい仕事だ。

「しばらく仕事を休むのしゃーない。頑張れ俺、負けるな俺！」

この時点での修慈は、まさか硯梨が犯人とは夢にも思わずシリアスに悩むのだった。

―カラオケ店―

『と言うことで、私が世界で最も高性能かつ最強の頂きに君臨する予定の神無と申します』
「そして余は神様です」

さすがに杖が声を出している姿を見られると社会的に危険な為、密閉された空間を手軽に借り受けられるカラオケへと来た硯梨一行。
途中で子供相手に”余のターン！ドロー！モンスターカード！”と決闘していた居候を回収。
簡単な成り行きを説明した後に自己紹介と洒落込んでいたのだが、気がつけば混沌とした状況になっていた。
さすがにこんな説明では信じまい、と硯梨は溜息を一つ。
しかし、こちらがフリーダムなら相手もまた好き勝手のエキスパートだったようだ。

「へー、凄い！　秘密は守るから混ぜて混ぜて！」
「おうおう、愉快な娘じゃのう。残念ながら才も魔力も持たぬようだが、んなものどーでもよい。いずもと行ったか？余の眷属に加えてやろう！」
「いよっ、さすが神様！　懐が拾いっ！　ってことで硯梨に杖をやったならあたしにも面白アイテム何かくださいな」
「うーむ、使い捨てのカートリッジすら初動に必要な魔力がないので使えん。何か考えておくのでこれでも持って行くとよぃ」

月が取り出したのは金色の指輪だった。

「どんなステキ効果が？」

「本来は硯梨のネックである防御を補うために作った物なのだよ。余の鱗を加工し生み出した故、持ち主を炎熱から保護・及びあらゆる病魔・異常から身を守ってくれる。太陽とは炎の王であり、陽光は不浄を浄化するという概念を活かした常時装着推奨アイテムかのう」

「ふーん」

「生体認証パターンをぬしの物に変更した。これを手放さぬ限り、寿命まで健康でいられることを保証するよ・・・・って、何が不満なんじゃ？」

てっきり喜んでもらえると思っていた月だけに、頬を膨らませて不満そうな少女に困惑していた。

おかしい、人間の望みは無病息災と遠い昔に教わった。

まさか現代では価値観そのものが変わってしまったのだろうかと不安になってしまう。

しかし、神に不安を抱かせた数少ない少女の口から飛び出したのは全く別物だった。

「確かに凄いとは思うけど、遊び心が足りない。すずもそう思わない？」

「え？　私は基礎が大事だと思う。広域殲滅とかの小細工はその後だよ」

『マスターは大火力の前に手数で押せて制御も容易な、ボクシングで言うところのジャブを重視するタイプですからね』

「でもさー、どうせならどかーんとか、ばかーん、みたいなのがいいじゃん」

マイク片手に物騒な発言を繰り返すいずも。
その姿は一般的にはかなりアレだが、感性が限りなく独自路線を行く神様には高評価だったようだ。
なにせお気に入りの娘ですら真人間を装っていても発言内容は病んでいる。
少なくとも基礎が大事と言いつつ、攻勢術式を引き合いに出す人間がまともなはずがない。

「わかったわかった。繰り返すが、注文に応じる性能を持つ魔導具を開発しておこう。神様嘘つかない、余を信じて気長に待つのだよ」
「はーい、嘘ついたら針千本口に入れてグーパンチだかんね」
「はっはっは、さらりと致死ダメージ級の罰ゲーム！　このノリ、この切れ味鋭いツッコミ、余は得がたい人材の発掘に成功したぞっ！」
「おうさ月の兄ちゃん。これであたしたちは友達だ。言っとくけど、神様だろうと化け物だろうと敬わないし、恐れもしない。その代わりため口でいいっしょ？」
「かまわんよ。ちなみに余の眷属で敬語を使わないのはぬしで二人目。愛玩動物らしく今後は遠慮無く頼ってくれたまえ」

二人はがっしりと握手を交わし、実は温度差のある親交を深めるのだった。
いずもとしては一風変わった友達が出来たという純粋な喜びを。
対し、月は毛色の変わった人間の餌付けも一興程度の感情しか抱いていないのだが。

「うっし、事情はだいたい理解した。んじゃこれからは月の兄さんと神無たんの歓迎会だ。あたしの歌を聞けーっ！」

このためにマイクを手放さなかったらしい。
流行の曲が流れ始め、いずもの歌声が軽快に紡がれていく。
『私の歌うという行為は保存された音声データの再生であり、完璧な模写でしかないため無駄と判断します。聞き手に廻りましょう』
「意志があるならデータに頼らず自力だけで己を表現しろ！　かの有名な自己成長型ナビゲーションシステムですら自主的に歌うし、諺だって小粋に使いこなす。世界最強を目指すなら出来ないなんて言っちゃダメじゃ？」
『む、挑戦状ですか。売られた喧嘩は買いましょう。芸能面でも高性能を見せつけ、私の優秀さに舌を巻くがいいかと存じます。物語の中とはいえ、世界タイトルを幾度と無く獲得した偉大なるアスラーダ先輩にだって負けません』
「いいねー、いいよー君。主人と違って空気が読めるなっ！」
『当然です。従者として円滑な場を提供するために必要な技能ですので』
「・・・・ふーん」

冷めた声で呟く隣の少女に気がついたのは月一人。
物騒な術式が構築されていく様を見て嘆息するが、止めるつもりはない。
子供同士の児戯に口出しするような無粋な真似をしては神の名折れである。
そこで飲み物を一啜り。いかなる痕跡も残さぬよう、最強クラスの防御術部屋の内部にこっそりと展開しておく。
「あいつはさー、昔から我が道を行くんだよねー。困ったら基本的にグーだし」
『ええ、さすがの私も予測演算不能の行動を突発的に取るマスターには困っています』

しかし、そんな気遣いに気づかない一人と一本は火に油を注ぐことを止めなかった。
硯梨の過去の奇行に花を咲かせ、着火の瞬間をどんどんと早めていたりする。

「ねぇ、親友と相棒・・・・ちょっとお話いいかな？」
「なんだね？」
『何かお困りですか、マスター？』
「うん。話を聞く限り、“暴力的”で“人の話を聞かないタイプ”なんだよね、私」
「要約すると正しくその通り」
『いずも様から得られたデータを検証しましたが、間違った結論ではないと判断します』
「なら、さ・・・こういう事をしても二人の思惑通りでしょ？」

脆くて短い堪忍袋の緒が切れたことを告げ、硯梨は脳内で最後の処理を開始した。
“空気”、“圧縮”、“伝播”を結合。構築名、音波の炸裂を定義。
しかし完成にはまだ早い。
術式展開プロセスに割り込み、並行処理開始。
追加で概念を付与。属性に“振動”、効果対象を個体名“いずも”、及び魔導具“神無”のみに限定。

「おまっ！？」
『攻撃感知。狙いは・・・我々！？』

教室に地獄絵図をもたらした音波の炸裂は、圧搾空気の解放による衝撃波が主軸だった。

しかし今回はより効率の良い破壊を求め、ピンポイントに絞った振動波だ。
単純な衝撃で貫くよりも深く、芯に残る改良版は伊達ではない。

『警告、内部機構にエラー発生。損傷軽微で自己回復可能ではありますが、唯一無二のパートナーに何故このような蛮行を？　私は理解しかねます』

全身をびくんと震わせ卒倒したいずもの代わりに抗議の声を上げたのは神無だった。
最小威力に絞っているようだが、防御の術を持たない一般人に耐えろという方が無理だろう。

「月、この子の人格設定失敗してないの？」
「その道で神様と崇められる異形に任せたんじゃがな。ま、余に言えることは唯一つ。一歩離れて見守った感じ、割れ鍋に綴じ蓋。アクの強い物同士、時を置けば上手くいきそうじゃないかと思うのだよ」
「月までそんなことを！？　私は悲しいよ・・・思わず手を出したくなるくらい」
「ええい、キリがないからやめい」
「そ、そうだね。ついカッとなると手が出ちゃうのは悪い癖だよね・・・うん」
「それよりも、余は一つ課題を出そうと思う。聞けば手頃な退魔師が居ると言うではないか。本来ならば蕎麦屋で見つけた幸薄そうな小娘をターゲットにしようと思うていたがの、手近なそちらを倒すのだよ」
「ん、課題なんて言わなくてもそのつもり。対人戦には元々興味があるもん」

「宜しい。ならば邪魔の入らぬ戦場は準備しておこう。明日にでもさっくり死合を挑むとよい」
「有り難う、陰に日向に手を貸してくれて感謝してるよ」
「なぁに、近々借りを返して貰うから気にせず構わぬわ。それにの、ぬしは現代における余の巫女。昔と同じ鉄は踏まぬ為、強くなってくれればそれでよい。神無のように上を見すぎても困るが、弁えた硯梨ならば問題ないじゃろ」

いつも笑みを浮かべ、飄々としている月の表情に一瞬陰りが差していた。
硯梨はそれを見逃さなかったが、あえて口を出さない。
神様も人間と同じように触れられたくない過去があるのだろう。
ならばそれを無理に問い質すのではなく、自分から話してくれるのを待つべきだ。
どこまでの意味合いが込められているか判らなくとも、自分のことを巫女と呼んだからにはいつまでも心を開かないはずがない。
古来、巫女とは神の言葉を伝える者であると同時に伴侶であるとさえ言われるのだから。

「努力は惜しまないから大丈夫。でもせっかく遊びに来たんだし、少しは遊ぼっか。月、いずもを起こせたりしない？」
「任せなさい。これくらい一発だよ」

お安いご用と指を鳴らした月は、予備動作無しに小さな魔法陣を発生。
魔の光は医療用のCTスキャンのようにいずもの体を頭から足までを通り抜けると、あっけなく消失した。

「生体パルスをちょちょいと弄り、ついでに体内バランスも整えた。一曲歌うまでには起きるじゃろーよ。元々気絶しとるだけだしの」

「さすが神様だね。じゃぁ・・・歌っちゃおうかなっ」
『お邪魔してはと思い口を噤んでいましたが、マスターの歌唱力に期待します』
「うー、そう言われると照れちゃう。普通だよ、普通」
「余は期待で胸がいっぱいです。歌えそうな曲を入れたから頑張るのだよ」
「はいはい、それじゃあ・・・コホン」

リズムを刻むのは月の手拍子と、神無のコアが彩る光の点滅だ。
何やら敷居が高くなってしまったが、失望させないためにも頑張ろうと思う硯梨だった。

第四話　誤解から生まれる物語（後書き）

気がつくと、評価ポイントがついていてびっくり。
読んで頂き、有り難うございます。

第五話　説得は笑顔のグーで

“どうしても、あなたに伝えたいことがあります。放課後、屋上まで一人で来てください。待っています”

生まれて初めての経験に修慈は心臓の高鳴りを押さえ切れなかった。

靴箱を開けてみると中に置かれていたのは簡素な茶封筒。中身は一枚の便箋であり、綺麗な字で綴られた内容を読む限り俗に言う恋文ではなかろうか。

「うっわ、黒澄っていずもの友達だったはず。あの馬鹿たれと違って好みだし……来たよ！　俺にも春が来たよ！」

絶対に悪戯ではないと言い切れないが、曖昧な記憶ながらもこんな事に加担するタイプではなかったはず。

仮に何かの罠だとしても、千載一遇のチャンスを見過ごしては男が廃る。

むしろ騙されてもそれはそれで美味しい。話のネタが一つストックされるのも悪くない。

「告白の後は当然一緒に帰ってデートっ！　彼女の居る生活って素晴らしいぜ！」

盛大な勘違いをしてしまった事に気がつかない少年は、宝石のように煌く未来を夢見てガッツポーズを決めるのだった。

<蛇神と少女の幻想曲～第五話～　説得は笑顔のグーで>

ー放課後、屋上ー

「あー、ごほん、久しぶりだな、黒澄さん。待たせたか？」
「いえ、私も今来たところですから」
「と、ところで話とやらだけど……正直、嬉しさ半分、困惑半分って感じ。なんせこんな経験初めてでさ、年上なのにどっしり構えられそうに無い」
「あ、そうなんですか。てっきり経験豊富だと思ったのでびっくりです」
「け、経験豊富？　異性と向き合うことすら少ない俺をどれだけ過大評価！？」
「うーん……ちゃんと手紙を読んでくれましたか？」

何処か会話が噛み合っていない。そう考えた修慈は改めて眼前の少女を凝視した。
服装は場所が場所だけに制服。後ろ手に鞄を持ち、頬をやや朱に染めて真剣な目でこちらを見ている。
周囲にも特別おかしい点も見受けられず、誰かが潜んでいる気配

も無い。
　これでドッキリの線は消えた。おそらく、微妙に反応が変なのは緊張しているからなのだろう。
　ここは一つ年上として余裕を見せ、既にＭＡＸ予想の好感度をさらに上げてやろうではないか。

「恋心を振り絞った簡潔な文章、何度も読んださ。勿論ＯＫ、君の想いは確かに受け取ったっ！」
「こ、恋心？　確かにわくわく感はありますけど……」

　いよいよもって話が理解できない、そんな様子の硯梨は首をかしげて言葉を切る。
　そして僅かな間を空けて頷きを一つ。

「先輩、私の申し出を受けてくれるのでしたら人目のつかない所に行きませんか？　ＯＫを貰えると信じていましたので、場所の確保は万全です」

　いきなりそう来るか。色々と踏むべきステップを飛び越えて、いつかは辿り着きたいゴールがスタートラインとは冗談がきつい。
　なまじ身持ちが硬そうに思っていただけに、修慈の頭はこの時点で壊れかけていた。

「まじかっ！？」
「はい、自転車で十分にいける範囲です。昨日のうちに邪魔が入らないよう十重二十重の結界敷設を友人にお願いしてありますから、思う存分楽しめると思いますよ」
「へ、へへっ、とんだサプライズ……今すぐ行こうぜ！」
「はーい」

途中から危険な単語が交じり合っていることに舞い上がった男は気がつかない。
硯莉の目が恋する其れではなく、遠足を前にした子供の眼差しだと言うことすらも。

―街外れ、工場跡地―

「……あれ？　楽しいことをするにしては場所が悪いような。どちらかっつーと、不良が抗争やらタイマンやらで使う雰囲気じゃね？」
「勿論です。ここなら気兼ねせずに撃てますし……あ、でも遮蔽物を利用すれば近接型の先輩の方が有利といえば有利。私って不利な条件であればあるほど燃えます。加減は無用ですよ？」

見たことも無い形状の高そうな杖を取り出し組み立て、割と流通しているカートリッジを次々に手込めするその姿。
向けられた杖の先端には闘志を乗せ、目に宿るは純粋なる好奇心。
紛れも無く魔を扱う者の姿だ。罷り間違っても恋する乙女ではない。

「なにぃ！？　何ソレ！　俺のスィートライフは？大事な話ってそれかよ！？」
「大正解でーす」

「つーか、何で俺！？」
「私を調べようとしてましたよね。迂闊でした……ちょっとお灸を据えただけで問題視されるなんて予想外です」
「……はっ、ひょっとしてアレを引き起こしたのは君かっ！　いきなり口封じに来るとは恐れ入るぜ。でも、それだけでこんな回りくどい真似をしたんじゃないだろ？」
「ご明察。でも、本当の理由……聞きたいですか？」
「ガラスのマイハートを砕いたからには当然だよ！　返せっ！俺の純情を！」
「勝手に誤解したのは先輩じゃないですか！」
「あんな文章を受け取ったら、男なら九分九厘同じ反応するわっ！」
「……そうなのかな？」
『ライブラリー検索終了、敵性対象の発言は妥当と判断します。悪いのはマスターであり、この色情魔の言い分にも一理あるでしょう』
「今の言い方って割と慰めになってなくね！？　むしろ傷口に塩を塗りこむ所業じゃね！？　つーか、喋ってるのって杖かよ！」
『黙れ非モテ族。己の身分もわきまえず、マスターをゲットしようなど百年早いと判断します。マスターのパートナはこの世に私だけで充分。失せろ害虫、それが嫌ならこれよりマスターにフルボッコされてしまえ』
「口悪っ！　しかもさりげに独占欲強いな！」

いよいよわけが判らない。
斬新な切り口の果たし状に呼び出されてみれば、何故だか罵倒され続ける謎の苦行。
そろそろ泣きたいと言うか帰りたい。
悪いのは自分なのかと自問自答するが、どう捻っても冤罪だ。

「先輩もぼちぼちやる気を出してくれたようですし……始めますか」
『敷設結界へのアクセス正常。複合概念展開』

つくづく人の話を聞かないコンビはツッコミに邁進する修二をよそに動き出す。
過剰としか形容できない認識阻害や人払いの概念を活性化させると、次の瞬間には弾装に押し込んだばかりの魔力カートリッジをロード。
未だ心構えの済んでいない獲物が反応するよりも早く、開始合図と一の矢を放っていた。

「まてまてまてーっ！　軽い漫才で油断させつつ不意打ちって汚くないかっ！？」
「先輩がどう受け止めようと、私はここに来た時点でゴングが鳴っていたと思います」
『砂糖に蜂蜜をかけた以上に甘ちゃんと判断します。常在戦場、これぞ常識』
「間違っちゃいないが……確かに間違っちゃいないが……」
「なら、そろそろ本気を出してくださいね。じゃないと――――――」
「と？」
「死にます」

その一言が本当のスタートだった。
瞬時に生み出されるは雷の力を内包した輝く球体。硯の前面に幾つも発生したそれは、初動の時点で最大加速を与えられた必殺の一手に他ならない。
初手は挨拶代わりだったのか狙いも甘く、その場の足裁きだけで難なくやり過ごした修二もこれには戦慄するより他になかった。
「俺は女だからって加減できないからな！」

少女の発した何気ない言葉は対魔師としての己を呼び覚ますに値する明確な敵意だ。
頭のスイッチを切り替え、目の前の相手を完全なる敵だと認識するもやや遅い。
この時点で回避行動に移る為の貴重な数瞬は失われている。
ならば、と選んだ手段は体に染み付いた練磨の成果。習慣で持ち歩いていた竹刀袋から愛刀を引き抜き、鞘から抜く間も惜しいと雷弾を切り払う。

『反応速度より敵性対象の戦闘力を計測。想定範疇のスペックと判断します』
「じゃあ予定通り、距離を制するところから始めようか」

体の運動係数を引き上げ、修二が刀を振り終えるよりも速く後ろへと跳躍。
しかし万が一の反撃に備えて目だけは決して逸らさない。代償として背後の視認を怠る失態を犯しているに見えるが、実際はそうではなかった。

『全周探査式“アルゴスの百目”常駐。視覚情報と同調開始』

一見誘い込んだように見えても、実は硯梨とてこの場所がどうなっているか判らない。
温いといわれればそれまでだが、目的はあくまでも腕試し。条件が五分での上で勝ちを拾わねば意味が無いのだから仕方が無いだろう。
しかし無策で挑みかかるほど甘くも無い。事前調査の代わりに知覚強化の術式を用意してあるのだ。
杖に備わった機械式のセンサーと魔術による視界補正を併せ、自分を中心とした１８０度の視界を確保。

常に全てを認識していては消耗が激しい為、必要に応じた視覚情報の拡張術式を少女は起動する。

「緊急事以外は百目を維持で」

『了解』

まるで背中に目がついているかのように錆びたドラム缶の上に危うげなく降り立つと、足を止めた獲物に追撃を開始。

心構えの差から得たアドバンテージを最大限に生かすべく連続で術式を構築する。

先ず発現するのは鏑矢代わりに放った光弾の本気版だ。

処理を極力軽くして連射性を高めた単純な術式だが、初期に付与していた誘導や遠隔操作の追加概念を切り捨てた結果、弾速と威力へと十分なリソースを割り当てる事に成功している。

やはり通常弾はばら撒いてこそ華。この辺りの考え方はＳＴＧ好きの血だろうか。

「ガチだ！　混じり気無しのガチだよこの子！」

一度に放たれる弾数が両の指で数え切れる範疇とはいえ、連続した射撃を正面突破することは難しいというか無理だった。

過去に相対した異形には石礫を投じる河童や粘液の塊を吐き出してくる蛙もいることにはいたが、無邪気な悪魔はそれらを遥かに凌駕する。

初手を鞘付で受けたのは偶然の産物だが、実に運が良かった。

少女の矢は雷撃。それも半ばプラズマ弾に近い”魔法”よりも”現実の物理法則”的な意味で危険度の高い攻撃である。

故に対魔の力が付与されていようと主力武器の鋼は通電してしまう。

つまり修慈に残された防御手段は回避の一択しかない訳で、実に

不利な相手なのだ。

「遮蔽物が無けりゃヤバかっ……おおう！？」

転がり込むように逃げた先、工場のひさしの下で呼気を整えようとした瞬間だった。

産毛が逆立つような悪寒が走り、止まっては危険だと第六感が訴えていた。

こうなれば剣士は迷わない。荒い息のまま遮蔽物の多い右側へとサイドステップを踏む。

するとコンクリ作りの壁もなんのその、今の今までいた空間を閃光が貫いていた。

「せんぱーい、まさか終わってませんよねー？」

聞こえてくるのは殺意の欠片も感じられないお気楽な声だ。

反射的に“遊び感覚だなぁ、おい！”とツッコミそうになるが、声を出しては位置情報を教えてやるようなもの。ぐっと堪え、気配を潜めて移動を開始する。

「これだから素人は……一発殴ってお仕置きしちゃる！」

殺す発言をされようと、自分にとって人間は敵ではない。人を護るのが退魔師の本懐。それが顔見知りであれば尚更だ。

苦労はするだろうが一つ峰打ちで片づけ、お灸を据えようと決意する修慈だった。

しかし、この考えが甘い。甘すぎた。

『熱源センサー、対象を補足出来ずにロスト。二度も予測から逃れるとは生意気な。敷地内全てへの焦土作戦に切り替えては如何かと

判断します』
「課題の一つに消費魔力の上限設定を設けてるんだよ？　出来なくもないけど、残段数は五発。討ち漏らしちゃったら目も当てられないからダメ」
『了解、このまま優位を維持しつつ砲撃戦を続行しましょう。しかし誤りが一つ』
「？」
『常駐術式の維持コストを忘れています。つまり、残り四発が正解かと』

神無が不足分を補う為に中身を空にした薬莢が足場に落下し、小さな音を立てる。
楽しくて、本当に楽しくて、ついつい計算に甘さが混じってしまったようだ。

『ちなみにマスター、現在登録されている術式は全て加減が出来ません。敵の回避能力により命中ゼロですが、本当に当ててしまっても？』
「気は進まないけど、他流試合で命を落とすなんて日常茶飯事だってお母さんが言ってた。それに、いずもの幼馴染みの命も故意に奪うつもりはないんだよ？　でもね、加減をして私が逆の運命を辿っちゃったら本末転倒。只でさえこっちは新米とロールアウト仕立ての不利コンビだって忘れてない？」
『……素敵に無敵な英才教育を受けているようで何よりです。マスターを前科持ちにしないよう、私が威力&属性定義を制御しましょう』
「どうして口調が緊迫した感じに！？」
『お気にせずに』
「ひょっとして武者震い？」
『お気にせずに』

「心なしか棒読み？」
『お気にせずに。それよりも移動物体補足。後退を続けるのも手ですが、距離を詰められる前に一斉射が無難と判断します』
「今、絶対話を逸らしたよね！？　露骨に探査式を放ってまで話を脇に除けたよね！？」
『対象の加速を感知。些細なことは忘れて現実を見るべきと判断します』
「あーもう……手早く先輩を蹴散らして問いつめるから忘れちゃ駄目だよ！」

獲物を目視せず、汎用砲術“天弓”を起動。これは大まかな位置を補足しているからこそ出来る芸当だ。
当たれば幸い、当たらずとも足を止める戦術は古来より受け継がれた定石。距離を削られることがそのまま窮地に直結する硯梨が選んで当然か。
稲光が一度空へと舞い上がり、直後に雨となって大地へと降り注ぐ。
乱数を織り込んだ天弓は抵抗もさせぬまま修慈を貫いたはずだった。
殺してはいかんだろと、神無の独断で殺る気満々の主に無断で殺傷力を弱めたにしても、生身で雷弾を受ければ只では済むまい。
こうも楽勝では対人戦闘の訓練には成らなかった、と蓄えた余剰魔力を排出しようとした時である。

『二発命中を確認。お疲れ様ですマス――――』

しかし、定石は有効であるが故に周知されていた。
素人の硯梨が知ることを、仮にも実戦経験を持つ修慈が気づかない訳がないと言うことを失念していた神無である。
センサーが捕らえたのは逆手に刀を握り、ダメージなど無いとば

かりに疾駆する剣士の姿。
神無のＡＩは現実を理解出来ないと混乱し、どこに間違いがあったのかと内部チェックを開始する。だが、全てのシュミレーション結果が叩き出すのは行動不能の勝利のみ。
あり得ない、敵の能力値を見誤ったとでも？　この世界最高のスペックを誇る己が？

『マスター、至急後退を！　今なら辛うじて優位なポジションを維持可能！』
「あ、やっぱり小技で倒しきれるほど甘くはないんだね」
『落ち着いていないで運動系数の改変を！　連続使用による負荷はこの際無視して欲しいと判断します！』
「いくら相棒でも、さすがにこの短期間じゃ私と言う人となりを理解できないと」
『式術の呼び出しを確認。これは……まさか！？』
「下がるより、全霊を込めた一発で向かい合うっ！」
『マスターの性格を考慮し忘れました！　腹を括り、展開シークエンス代行が最前手と判断。収束・増幅魔法陣展開まで５秒！』
「再構築に一番難儀した魔法……無駄な手間暇じゃなかったはず！」
『問題点のオールクリアを確認。発動まで残り８秒を切りました。カウント開始します』
「当たれば勝ち、外れたら負け。お祭りの射的でスナイパーと呼ばれた私は外さないよっ！」

藪に蛇を見つけて捕まえに行くのが硯梨なら、石橋を叩いて渡るのが神無だ。
常に最悪の事態に備え、工場と廃ビルの間に布陣させたのはサポート役の仕事。
既に一度敵戦力を見誤っているので断言は出来ないが、有効射程と火力はこちらが上なのは確かだ。

少なくとも硯梨が仕掛けたような壁抜きを修慈が敢行できる可能性は皆無だろう。

『こちらの砲撃特性は限りなく異端。予測できるものならしてみろと判断します』

犯したミスはけして軽くはないが、まだ取り戻すことは可能だ。何せ今は失態を恥じるより、最高のサポートを見せるべく集中する必要がある。

が、ここで素直に従わないのが意志持つ杖の真骨頂。

硯梨の手により展開された魔法陣が大気中の微弱な電子を掻き集める様を俯瞰しつつ、保険の仕込みにかかっていた。

「今の私が持ちうる最強の火力、これも耐えるなら負けを認めますよ先輩！」

一枚一枚が別の効力を備えた光る円陣が次々と生まれ、発動までのカウントダウンは最早ゼロ。防御も、回避も、一切合切を捨て去った捨て身に近い雷光が生まれ出でようとしていた。

すると応と叫ばれる同意の意。修慈とて勝利条件が判りやすくなる事にメリットはあれど、デメリットは存在しない。

色々とおかしな娘だが、自分で宣言したからには素直に敗北を受け入れるはず。幼馴染みから聞いた話と、己の知る情報を重ね合わせても妙な悪あがきはしないと断言しても良い。

ならば、互いに取るべき行動はたった一つ。

「耐えるだけじゃねぇよ、喉元に刃を押し当ててやるさ！」

景気よく啖呵を切った修慈だが、内心は冷や汗だらだらだ。

なにせ戦術が稚拙な点を除けば硯梨がスペックを全て上回ってい

る。中でも恐ろしいのは火力。まともに貰えばどうなるのやら、考えたくもない。
今のところは唯一の取り柄である小細工で騙し斬れているが、万が一見破られるとその時点で詰みが見えてしまう。
嬉しい誤算は魔女の射撃が正確すぎる事だ。だからこそ総合的な能力では中の下でしかない修慈でも硯梨の雷弾を防ぎきれているのである。

「怖いわ……いや、マジ……」

進む先の正面は目映い光が収束していく魔女の縄張り。大気が帯電し、一歩近づく毎に産毛が逆立つ恐怖はなかなか味わえるものではない。
だが止まるつもりはない。殺さずに止める、これを成すには今しかないのだから。
そしてそれは硯梨も同じ。
この攻撃でカートリッジは空、内部貯蔵分も全て全額どん。腰にリロード用のマガジンは納めているが、これに手を付けてしまうとルール違反だ。おそらく何処かで様子を眺めている保護者に笑われてしまう。
故に両者の思惑は合致する。
短期決戦、一発勝負。決着の瞬間だ。

『殲滅砲術“雷神槍”起動』
「死なないことを祈ってます、先輩っ！」

未完成でも鬼を穿ち川の水を蒸発させた雷神槍。術としての欠陥を克服し、完成度を増した光の槍がたった一人の人間めがけて放たれる。
最早、神無も加減の二文字は捨て去った。天弓が効果を現さなか

ったのは威力不足に違いない。
おそらく強固な障壁でも展開しているのだろうが、今度ばかりは例え結界であろうとも打ち抜いてみせる。
死ぬなら死んでしまえ。掠っただけでも致命傷、直撃ならば全身蒸発も免れない鬼札を切ってやる。
そんな危険思想を抱いた神無だったが、またしても予測は裏切られることになる。
等しい烈光が避わす暇も無く修慈を貫いた。これは間違いない。各種センサーの観測と、主人の表情が和らいだことからも断言できる。

『そんな馬鹿な!?　当たり判定が無いとでも!?』
「手応えがない!」

ここで神無の中で一つの仮説が浮かび上がる。

『マスター、周囲を薙ぎ払ってください!』
「考えることは同じだね。きっとあの先輩はフェイク!本物は近くにいるっ!」

一般的な砲術は威力が高い代わりに、発動中は射線軸を僅かにずらすのが関の山だ。しかし、法外なスペックを持つ杖のサポートを受ける魔女の手はいとも簡単に常識を覆す。

「ワインダーモード!」
『維持可能時間は8秒。お急ぎを』

細腕に力を込め、手首の返しで光の本流をいとも簡単に制御。
それはもう打ち貫く射撃ではない。硯梨の身長を超える円筒上の刃持つ光の剣である。

ワインダー、それは硯梨の愛する往年の名作で常識とも言えるテクニックだった。
時機を動かす事で“発射中のレーザーごと移動する”定番の戦術なのだが、二次元を飛び出し三次元の世界で自在に操ることが出来ればどうなるか？
答えは実に簡単だ。元より“高出力の砲撃を振り回す”のだから、破壊の嵐が吹き荒れてしまう事は容易に想像できるだろう。

「待てぇぇっ！　幾らなんでも被害を考えすぎだろ！　こんな真似を続ければ逮捕だぞ逮捕！」
「誰も近づかない結界があるから大丈夫！」
「そう言う問題じゃねぇよ！」

大気をプラズマ化させながら工場を廃墟に変える硯梨の大雑把な滅多切りは、しかし修慈の軽口を止めることが出来ない。
九分九厘間違いなく目に映る剣士の姿は虚像、如何なる方法を用いてもダメージは通らないと主従は理解した。
本体の位置を掴めていない新米魔術師に出来るのは、範囲攻撃での炙り出ししか手が残されていないのだが――――

『残り二秒。せめて粉塵が落ち着けばセンサー類も回復すると判断しますが……』
「ちょっとだけピンチ……かな？」
『警告、残存魔力が規定値を下回りました。機能低下発生。一刻も早くカートリッジ補給を。このままでは座して敗北を待つだけと判断します！』
「そ、そうは言っても悠長に補充をさせてくれ――――」

己を縛るルールを破るにしても、カートリッジを込める余裕がない。

雷神槍が効果を発揮している今だけが何をするにせよ最後のチャンスだ。長期戦を見越して隙を見せてでも魔力補充を行うか、それとも二秒という僅かな残り時間を活かすべきか。
これまで即決即断だった少女は、初めての躊躇をしてしまう。
これが知能レベルの低い異形相手ならば何も問題にはならなかっただろう。
が、今回の相手は違った。

「やっと隙を見せたな。だが、峰打ちだから安心しな」

突如発生する気配。どんな手段を使ったのか常に監視を怠らなかった神無の探査をくぐり抜け、近場に潜伏していたらしい修慈が一足他に非我の距離をゼロへと縮めてくる。
まさに教科書通りの完全な不意打ちだ。これには高速詠唱を武器とする硯梨でも間に合わない。

『最悪のシナリオです。が、万が一の保険を準備してこそ一流と判断します』
「負け惜しみは止めろ、１００％終わりだっつーの！」
『三下風情が吠えるな。保留魔力解放、圧縮術式展開』

絶対の自信を持った刃の一降りは虚しく空を切る。
と、同時に修慈を威圧するのは勝負を諦めない意志に満ち溢れた少女の目だった。

「運動系数改変……常駐を切っていたのに、この事態を予測して準備してくれたんだ」
『剣士と相まみえるから以上、近接戦の可能性を考慮して当然と判断します。マスター、天弓一発分の魔力も用意していますので逆王手を――――』

まさかの状況に刀使いの体が崩れている。
まだ普通に斬りかかっていれば違っただろうに、峰を返すなどという不慣れな真似をするから自滅するのだ。
些細でも体が記憶しない要素が混ざれば重心はぶれる。それを知らない相手でも無かろうに。
対して軍師に甘い考えは既に無い。主人に求めるのは必殺の一撃。
今度こそゲームセット。どんな手品を使われたのか未だに理解できないが、やっと終わりだと胸をなで下ろす神無だった。
しかし杖は主人の行動予測に関しての目論見が甘かったと後悔する事になる。

『マ、マスター！？私たちはガンナーですよ！？』
「せんぱぁぁぁい、これでトドメですよっ！」

用意したシナリオを無視した何の捻りもない打ち下ろし。
頑丈と聞いている神無を大きく振りかぶり、硯梨は鈍器による殴打を試みていた。
狙うは体の中心。最も避けにくいベストチョイスだ。
しかし――――

「……お、隙だらけ。ご馳走様！」

修慈は体を捻ることにより鋼の杖を体に触れさせることなく通過させ、前につんのめった硯梨に親指を立てる。
それだけ余裕とのアピールなのだろうが、される側としては何とも苛々させられる。
特に苦心したお膳立てをひっくり返された神無は特に顕著で、創造主より機が熟していないと封印された機能を無理矢理にでも起動させようかと真剣に悩むほどに。

だが、そこは自我を持とうとも道具の本質を忘れない賢い子である。
けして我を忘れず、逆に良い機会と自己完結。後学の為、駄目な使い手には高い授業料を支払って貰おうと考えた。

『アルゴリズムで解けない物があると理解できただけ収穫と判断します。耐物障壁及び、全常駐術式の停止プロセスを開始』
『神無？』
『マスター、私は思いました』
『何を？』
『戦いとは机上で行う物にあらず。やはり五体で感じなければ意味がないと』
『うん、そうだね。でも今は戦いの最中だよ。かなり窮地だけどまだ終わって――――』
『終わりました。機械が言う言葉ではありませんが、現時点で敗北が確定しています。九分九厘ではなく、十分、１００％詰みです。乱数発生余地のない決定事項と判断します』
『そ、そうなんだ。でもまだ防御に残魔力を注ぎ込めば一撃くらいなら――――』
『魔力は既に些細な術式すら展開不能な残容量。僅かな欠片も天弓用に加工してしまった為、今更他の式に転用できるわけが無いのですが何か文句でもマイマスター？』
『ご、ごめん。でも決着はこの手で――――』
『その駄目な考えを払拭して頂きます。予測では昏倒、もしくは呼吸障害が発生する程度に加減されたダメージです。人はこのような場合、昔からこう言うそうですよ？』
『？』
『馬鹿は死ななきゃ直らない。二度と妙な真似を起こさないよう直撃を食らう必要があると判断します。根性です、マイロード』
『か、神無が……私を見捨てた！？』

『グッドラック』

この間、僅か一秒。念話による最後通告は、いよいよもって万策が尽きた駄目押しだった。

まさかの事態に心をぐっさり刺され、さらに追撃の刃が無防備な脇腹へと吸い込まれていく。

骨が軋み、肉が押し潰される感覚。いくら加減をしようと、防御の術も身を守る防具も持たない少女の肉体を容易に破壊するのが鉄の塊たる刀だ。

『試算を破壊力が上回りました。私のシュミレーションもまだまだ甘いと判断します』

運動エネルギーを元にして、刀の質量から攻撃力読んだ神無。

しかし技術を加味しなっかたと言うよりは“出来なかった”が故に目算が甘い。

とは言っても大幅に上回る訳でもなく、驚くほどでも無いレベルなのもまた事実だ。

負けを認めるなど許し難いが、敗北から学ぶ事もまた必要だろう。

次がある相手ならば再び相まみえた時に借りを返せばいい。この相手はそういった分類の敵なのだから。

『マスターの学友の知人、投降してやります。武器を引――――』

神無があくまでも上から目線でそう告げようとした瞬間だった。

崩れ落ちるかに思えた硯梨が倒れない。四肢を震わせ、呼吸も荒く、それでも目が生きている。

「っておおい！　まだやる気じゃねぇか！」

修慈には元より不本意な一戦だ。
開始時に宣言したとおり、顔見知りを痛めつければつけるほど罪悪感は高まるばかり。
大人しく話を聞くのならば、これ以上高望みをするつもりはなかった。
が、それが甘さとも言える。
神無の言葉に力を抜き硯梨を気遣おうとすら考えた少年は、弛緩させた体に再び活を入れようとするも遅い。
倒れ込むように低い姿勢から伸びる魔女の手、その照準のような動きに対応が間に合わない。

「騙し討ちかよっ！？」
『そんな汚い真似をするつもりはありません。大丈夫、いかにマスターでも魔力がスッカラカンでは何も出来るはずがありません』

そうは言うものの、この不安は何だろう。
主人の体をモニタリングする神無には打つ手がない、打ちようがないと断言するに足りる根拠がある。
せいぜいが強化されていない素の筋力による打撃が関の山、そんなことをしても悪あがきにすら届かない無様な負け惜しみだろうに。

『マスター、誇りを持った行動を。何をするか解りませんが、英断が必要と判断します』

返事はなく、代わりに返ってくるのは怪物的な速度で構築されていく術式の片鱗だ。
基本的な設計は音波の炸裂のようだが、ベースは同じでも何かが違う。
予想される完成型から察するに、構文の長さは三倍以上。最早何が起きるか予測できない代物である。

しかし、と神無は逆に考える。
術式を組み上げるのは問題ないだろう。極限状態だからなのか、通常時の二倍以上の処理を発揮するのもまた自由。だが、如何せん魔力が足りない。
必要となるであろう魔力は安く見積もってカートリッジ一発分。いくら強力な術式を完成させようと、燃料がなければガラクタも同然だ。
車がガソリンを必要とするように術者には魔力が必要不可欠。無い物はない、この点に絞れば太鼓判を押せる神無が首を傾げてしまうのも必然だ。

「術式事前チェック・・キャンセル、全エラーを無・・視。最後の・・本当に最後の抵抗……勝負ですよ……先輩」

空気圧縮術“音波の炸裂”、電子制御術“雷神槍”一部並列複合起動。
音波の炸裂の応用によりほんの少し無理をすれば掴めそうな修慈と自分の間、その僅かな隙間の気体をゼロに定義して擬似的な真空を作り出す。
これで準備は整った。いかに効率よく限られた力を扱うか、只それだけを追い求めて行き着いた一つの答えを少女は発現させる。
再現する現象は真空放電。空気という天然の絶縁体に阻まれ、本来の力を発揮できない雷の力を１００％に近い形で扱えるようにする殺しの技だ。

「一点……突破、“雷王・・振”」

タンクが空の硯梨。しかし魔術は形を成していく。
一体どこから不足分を補っているのか一頻り悩む神無だが、ここに至ってついに気がついた。

答えは簡単だった。理屈は簡単だが、代わりにデタラメな力を必要とする手段が一つだけ残されていたではないか。
魔力はある。己の血流が他のいかなる水分とも違う自分自身であるように、一度その身で取り込み加工した魔力もまた自らの一部だ。
例え術式へと二次加工を行おうとも、微細な残骸になろうとも、本質が変化するわけではない。
発動地点が遠方の天弓は無理だろう。しかし、この場所から放ち続けていた直射型の雷神槍は魔力の残滓を撒き散らしながら発動していたのだ。
魔力を粒子単位で制御できる主ならば漂う欠片を再利用する事も可能に違いない。

『つくづく規格外のマスターですね。でも、私にも意地があります』

神無には主人の為を思って作り上げた枷がある。
明確な殺意を持って相対する全存在、異物混じりの人外、そしてメインとなるであろう異形以外の命を可能な限り守るという使命が。
これより発現する力は回避不能、文字通りの光速術。
擬似的に生み出していた“都合の良い雷撃”ではない、古来より神の力の代名詞として伝わる“神殺し”の属性を内包した裁きの力だ。
一度は加減を捨て去った神無でも、根本ではどうにか生き残るとの楽観があった。が、幾ら難でもこれは確殺確定の予測しか立てられそうにない。
道徳を持たない月に生み出され間違った教育で育った硯梨をマスターと定められた神無は、反面教師と言うべきか根っこの部分が常識人である。
仮にこの少年を殺しても、死体は蛇が一呑みで証拠抹消&お褒めの言葉のコンボが待っているに違いない。
だが、そんな未来は認めてなるものか。さして悪意の無い少年の

命を守り、生涯を共に過ごす未来ある少女の手を汚させない使命があるのだ。
そこで神無は迷わず行動する。それが例え主命に背く行為であっても。

術式詠唱補佐機能起動。詠唱補助を逆利用した妨害を開始。

発動経路は形成済みなので手を加えることは不可能。ならば、とさすがに手間取っている高圧電流の生成プロセスに介入を始めた。
純粋な電気に“無害”、“拡散”の概念を組み込み人体への影響を可能な限り抑え、同時に周囲に漂う魔力回収にも一手間をかけることにする。

『吸引魔力の強制排出プロセス追加。そこのへたれ、私が邪魔をしている今がチャンスです。死にたくなければ意識を刈り取りなさい』
「え、俺につくのかよ！　忠義心とやらはいずこへ！？」
『諫言も忠義の形。間違った行為に対してイエスマンは主の為にならないと判断します』
「そ、そうか。じゃあ遠慮無く……って、なんかバチバチ危険な光がーっ！？」
『破壊力の八割を殺してあるので安心しやがりなさい下っ端。互いに一発ずつ殴り合う西部劇的締めくくりと思って頑張れと判断します』
「他人事だと思って適当だなチクショウッ！」

目には見えない道を光が走り抜ける。しかしそれは大半の力を奪われた唯の輝きだ。
直撃を受けるが市販のスタンガン程度の痺れ程度しか感じず、戦闘能力に陰りは無い。若干感覚のない腕を何とか制御して、狙い違わず少女の顎を掠めるように刀を走らせた。

『これで貸し一つです。私の中に優先事項Ａで保存しておきます』
「ランク付けがよく解らんけど、扱いでかっ！利子が怖っ！」
『利率はトイチが妥当と判断します。実にリーズナブルかと』
「はっはっは、返済までにどれほどの貸しになるのか解んねぇよ！」
『それはそれとして』
「めっちゃ大事な話じゃ！？」

集中のし過ぎで神無と修慈の会話が聞こえていなかった硯梨。当然のように受けた一撃を認識出来ておらず、膝から崩れ落ちるのも一瞬だった。
そしてそんな主人の横でやはり無造作に転がる裏切り者は言う。

『あなたはマスターに下心があると判断します。妙な真似をした場合、警察無線をハッキングして冤罪祭りを開催予定です。さぁ、ご存分に描写できないことを』
「……ちょっと飲み物買ってくるわ。戻る前に起きたらちゃんと話を聞かせろと伝えてくれ。後、お前さんが俺のことをどう思っているのかよーく解った」
『ああ、汚れを落とす為に私用のミネラルウォーターもお忘れ無く。水道水は嫌です』
「……はぁ、さいですか」

何だかんだと無傷の修慈は財布の中身を見つつ、トボトボとその場を後にするのだった。
歩きながら重くのし掛かるのは勝たせて貰ったと言う敗北感。最後の最後まで硯梨の覚悟が修慈の経験を上回った事実がじわじわと響いてくる。
「この差は何だ？俺だって化け物なら結構な数を倒して来た。明ら

かな経験不足を埋めたものは何処から……・？」

修慈は考えもしなかったことだが“殺す覚悟”と“倒す”までしか考えていない差がもろに出た結果ともいえる。

例えるなら威嚇しかできない自衛隊と、引き金を簡単に引ける素人。躊躇は死に繋がり、結果としての勝者は鍛錬の差を無視して招くものだ。

しかし、修慈は何も悪くない。

現代社会、それも日本の高校生で硯梨と同じような精神を持つ者は限りなくゼロ。まさしく魔女と言う言葉が相応しい少女が異常なのである。

「その辺含めて聞いてみるしかねーなぁ」

とりあえず、どんな形であれ戦いは終わった。

今は悩むことを止め、この後に控える尋問タイムをどうにかせねば。

口の立つ杖に何を言われるやら、まだまだ苦労は絶えないとため息を吐く修慈だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5786t/

蛇神と少女の幻想曲

2011年7月5日03時20分発行